



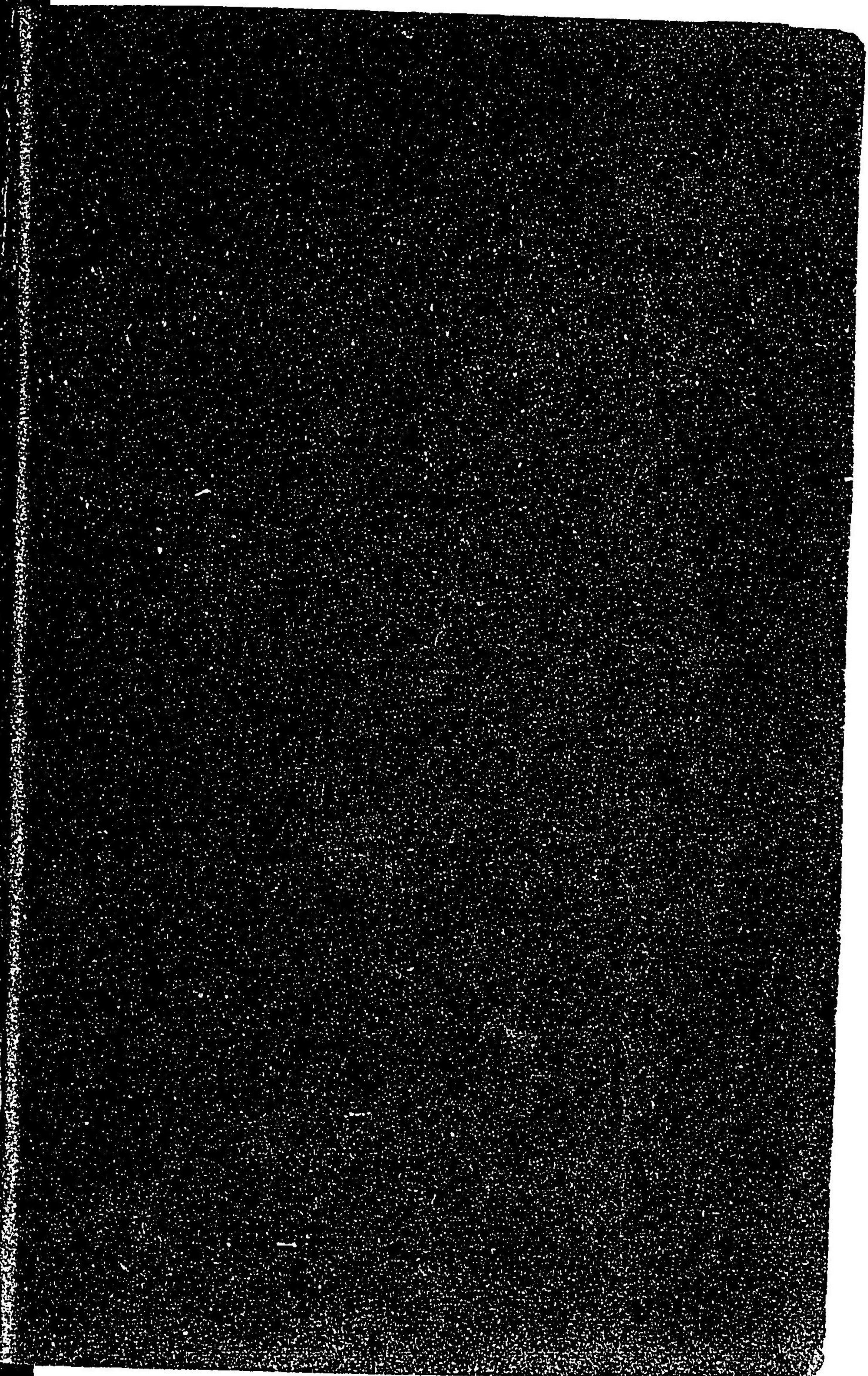
家庭叢書

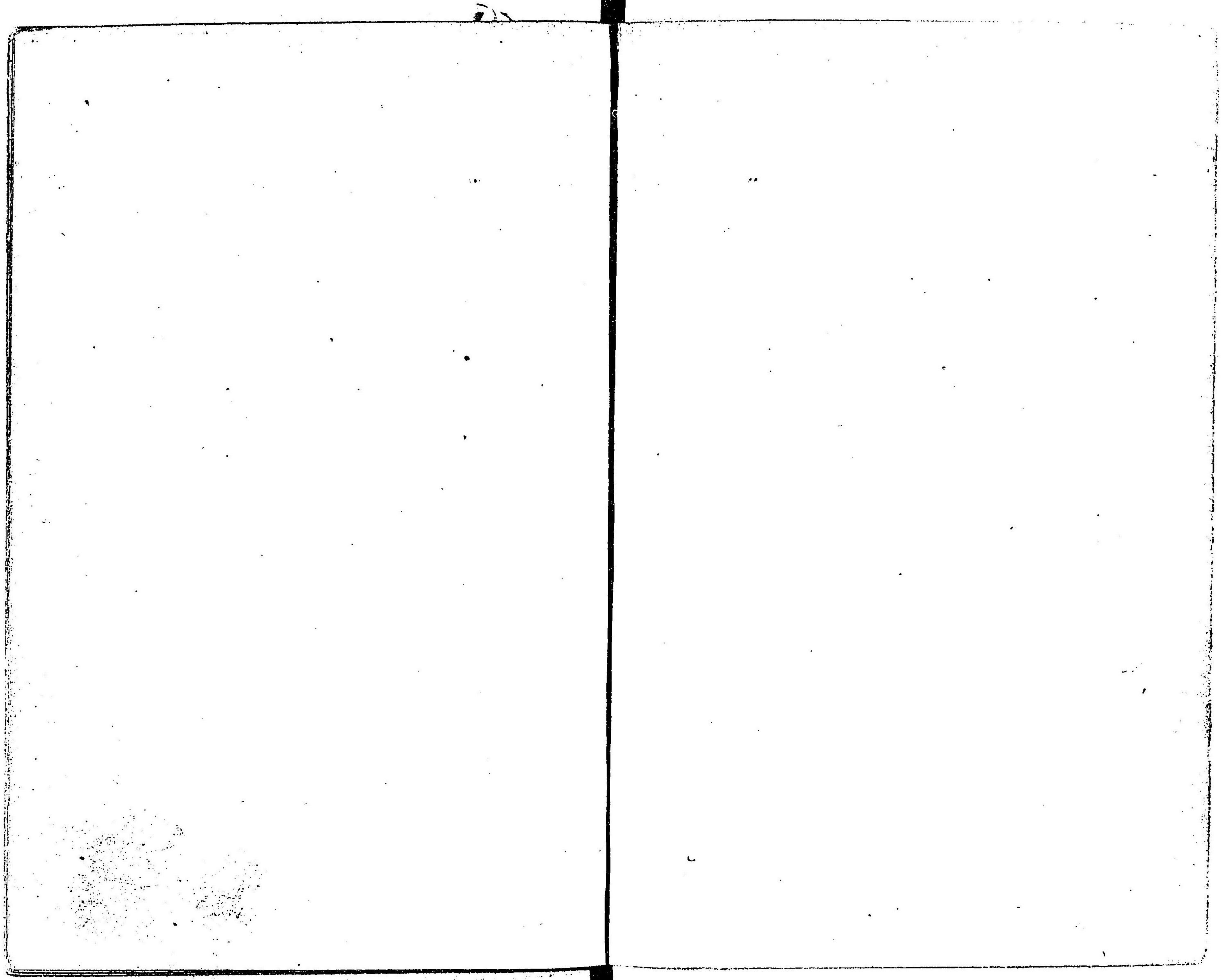
外編
紫式部

東京民友社發行

全十冊
完

71
225





目録



第一章

経歴——系統

○櫻の如き源語 ○日本文學の開拓者 ○彼れが一代の経歴
 ○其の門地と家庭 ○式部の式部たる所以 ○其の幼時 ○宮
 殿の生活 ○彼の一代は決して單調のものにあらず ○四種
 の異なる時代 ○紫式部と呼ぶ所以 ○日本紀局 ○彼の學
 識

第二章

式部の性行

○平安奈良兩朝に涉れる道德の紊亂 ○泥土に染まぬ白蓮
 ○彼の一代は雪の如く花の如し ○男兒の謀略往々閨房の

中より破る◎女性の弱點を打破したり◎忍びて樂府を授く◎乳雀は美の爲めに捕はれ黃鸝は聲のため命を落す◎外物の襲撃◎道長の戀慕

第參章 源語著作の時代

◎人口に膾炙せる俗説◎源語著述の時代◎沈思默考の時代◎彼は身を世の濁流渦中に投じたり◎人は時世の産見なり◎源語は王朝の野に於ける大なる革命の聲なり◎知己を千載に求む

第四章 式部が愛に對する理想

◎詩人の悲觀◎愛は人生の至美◎彼の著述は愛の結合に

第五章 源語の組織

外ならず◎愛は苦しきが故に樂しき也◎愛の靜躰と動躰◎意の如き愛は廣漠千里の平原に似たり◎彼の後世稱揚せらるゝ所以◎別かれの戀◎彼が本領◎遂げぬ戀◎苦中の快樂◎敢果なき戀の説明者◎戀情の齟齬◎彼は不完全の愛に對してのみ同情を表す

◎極めて單一なる意義を複雑ならしめたり◎彼が脚色は千遍一律なり◎人は變化を好むの動物也◎脚色の弱點◎組織の變化◎秋景に白帆の點々たるを添ふ◎組織上の高妙なる變化◎滑稽◎光風霽月を見るの想ひあらしむ◎哀

別の情嫉妬の活動◎喜悦と再會◎趣味更らに一轉す◎彼の筆力神の如し◎彼は如何なる筆法を使用せしか◎百尺竿頭更らに一歩を進むるもの◎全編を別かつて二段とす◎彼の奇構

第六章 源語に於ける『人』

◎物の哀れ◎彼等は凡て感情的也◎式部が描ける人物◎浮舟◎彼は只一死あるのみ◎明石の上◎義理人情の更らに愛より大なるものあり◎薰大將◎彼は絶望の人に生まる◎式部が靈筆に眩せられたる謬見◎一定の範圍に循環す

第七章 散文家としての式部

◎彼が散文◎彼が筆は社會の何れにも出入す◎源語一節中最秀の文◎艶麗の文◎流暢玲瓏なる文◎愛情を叙するの文◎彼が文章の勝つれたる所以◎叙景の文◎形容真に迫まる◎筆路嚴正にして犯すべからず◎人物の描寫◎崇高の文◎消息文

第八章 王朝文學と式部

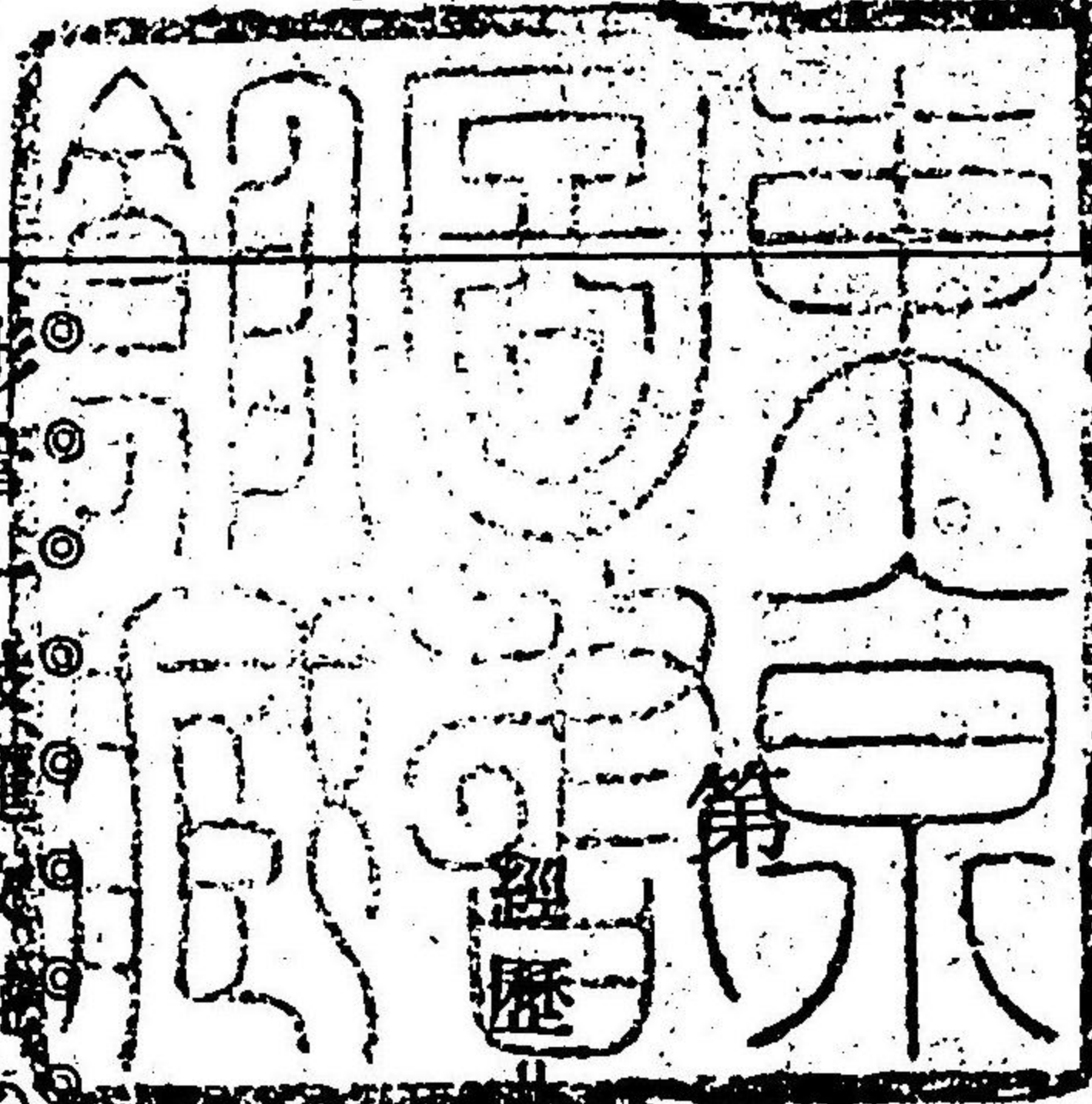
◎遙かに一點の東紅を望む◎平和は多く文學を産出す◎古文の舊躰を一新せり◎國文學上の一大光明◎當時の嗜好◎文章以外の勢力◎彼と拮抗すべき才女◎王朝文學に

於ける相反せる双光
第九章 源氏物語梗概

紫式部

第 九 章

綠亭主人著



經歷十系統

紫の一と本ゆゑに

武藏野の月は

みながら哀れさぞ思ふ

形管一枝麗文袴の如く錦腸萬斛妙想月の如く燦爛眩暈光
彩陸離千歳の下猶ほ克く鬼神をして舞はしめ婆婦をして
泣かしむるもの是れ豈に紫女一代の才筆にあらざ耶

奈良平安の兩朝文學の隆盛なること、實に空前絶後なりき、而して女文學者の纖巧精美なるもの、踵を接して起れり、小町、小大君、有智内親王、清少納言、和泉式部、大貳の三位、皆これ鐵中の鏘々たるものなり、凝想練句、各々其の玉藻を闡發し、或は清楚にして淡泊なるものあり、或は多涙にして多恨なるものあり、或は濃美にして絢爛なるものあり、或は華麗にして流婉なるものあり、千紫萬紅、彩雲烟霧、王朝文學の野は、實に春色を以て満たされたり、而して此の中にあつて、奇芬天に上ほり、國色目を奪ひ、純美靈活なるものは、獨り樂翁の所謂、櫻の如き源語にあらず耶。

嗚呼、王朝文學の春あるは、職として紫女が花の如き文と、月の如き想とに因れるなり、彼は王朝文學の開拓者にして、又日本文學の開拓者なりけり、宜べなるかな、彼が名聲、湖光と共に、千歳無朽なるや、

* * * * *

紫式部は越後守式部、亟藤原爲時の女なり、幼より敏慧才氣あり、長ずるに及んで、博ろく諸子百家の說に涉り、朝廷の典故知らざるなし、右衛門權佐藤原宜孝に嫁し、宜孝卒して後、再び醜せず、家に寡居して、讀書自づから快とせり、後出で、上東門院に仕ふ、而して其の出生と卒去の年月を詳にする

なし、之れ彼れが一代の經歷なり、彼れが此の經歷と此の造
調とを以て、遂に空前絶後の大著述をなしけるなり、
彼れが門葉固より賤しきにあらず、彼れが家庭固より低き
にあらず、然かれども此の位置と此の家庭とに依つて、一紫
式部の出でんことは、當時頗る餘想外なりしなるべし、唯彼
が才氣英發、非凡超絶、遂に以て此に至れるなり、試みに吾人
をして、彼れが門地と家庭に就き謂はしめよ、

門地に在りては、彼れ既に四姓の一に居れり、父の官爵賤し
とせず、當時中等以上の位置に居れり、而して彼が父爲時は、
菅三品文時卿の弟子にて、高名の學者たりしと謂へば、所謂

「眞名」の學、幼より浸染したるや、疑ひなし、又彼れは歌人とし
て其の名を知られたれば、歌學の一斑は修得せられたるな
るべし、然りと雖ども式部の式部たるは、彼れの家庭にあら
ずして、家庭を離れたる彼に在るなり、修得したる彼にあら
ずして、インスピレーションを吸収したる彼に在る也、受働
的の彼に在らずして、開發的の彼に在る也、知らず耶、式部の
身邊には、靈活自在なるゼニアスのあるありて存するを、

彼が幼なる時、聰明強記一讀遂に忘れず、阿兄惟規の書を習
ふを傍視するや、常に阿兄の忘れたるをも、知り居たり、又以
て彼れが當時如何に、超材凡逸なりしかを見るに足るべし、

是を以て彼れが父爲時嘗つて嘆じて曰く此の女恨むらくは男見たらざりしをど彼れが後年一技の筆能く鬚髯男子を壓倒して顔色なからしめたるは既に其の幼年に於て彼が父に説破せられたる所なりき彼れが宜孝に嫁しての後如何なる經歷を通過したるや史の以て徴するなく其の詳説を傳ふるに由無しと雖ども大貳三位辨局の二女を設けたるに依つて考ふれば普通女子の嘗むべき辛酸を経過したるや疑ひなし而して彼が宮殿の生活は長保三年四月廿五日宜孝卒して後四五年以後寛弘二三年頃より始めたりといふ説真に近きものゝ如し

宮殿の生活

彼の一代は決して單調のものにあらず

想ふに彼の一代は決して單調のものにあらず決して無味のものにあらず又決して千遍一律のものにあらず世の深窓佳人が子を生んで而して後死するが如き空蟬的生活は彼の斷じて踏まざる所なり彼は變化に遭遇し悲哀に遭遇し戀愛に遭遇し社交に遭遇し乃至恐喝に遭遇せり而して此の遭遇の閱歷は遂に源語となつて處世苦心の實を吾人に歴々指導するにあらず耶吾人をして彼れが閱歷せる一代を區分せしめよ即ち之を四種の異なる時代に分つことを得べし何ぞ耶曰く家庭の生活社交の生活非社交の生活宮殿の生活これなり家庭の生活は彼れが勉學要素涵養

四種の異なる時

の時代にして、宜孝に嫁するまでの間なり、社交の生活は、彼れが實用の時代にして、宜孝に嫁してより、宜孝が卒せしまでの間なり、非社交の生活は、彼れが生活中最も趣味あり、最も有益なる著述時代にして、長保三年より寛弘の初めに至るまでの間なり、宮殿の生活は、即ち宮仕の生活にして、寛弘以後の事なり、彼は少くとも此の四種の相異なる生活を經たり、而して此の四種の生活時代に又二様の性格を含有せり、何ぞ貴族的生活、平民的生活、是れ也、宮殿の生活は、貴族的にして、他は比較的に平民的生活也、之を彼れが經歷の大概となす、

紫式部を
呼ぶ所以

彼れ其の初め、藤原氏なるを以て、藤式部と呼ぶ、後改めて紫式部といふ、此の改名に就き、古人の説二説あり、一は源氏五十四帖の中、紫の上の事を、哀れげに書き綴りたるは、卷中唯一なりといふの故を以て、紫式部と呼びなせりといふ、他は「紫の一本」といふ古歌より出でたりといふ、紫の上より出でたりといふ説、真に近し、

日本紀局

又呼んで日本紀局といふ、これ彼れが著述せる源氏物語を乙夜の覽に供せしとき、一條帝讀んで嘆じ給はく、之れ能く日本紀を暗熟するものなりと、賞し給ひしより出でたり、彼れの學識の洪汎なる、彼の典故に通曉せるに至つては、殆

彼の學識

ん、ど、端、睨、す、べ、か、ら、さ、る、も、の、あ、り、其、の、日、本、紀、史、記、白、氏、文、集、
 な、ど、に、通、曉、し、諸、子、百、家、に、涉、獵、せ、し、こ、と、は、云、ふ、迄、も、な、く、三、
 史、五、經、の、高、遠、を、極、め、佛、家、經、疏、の、深、奥、に、詣、り、諸、家、の、日、記、和、
 歌、の、集、古、き、物、語、管、絃、箏、曲、合、せ、香、繪、裁、縫、の、諸、道、に、通、じ、た、る、
 趣、は、彼、れ、が、日、記、物、語、り、を、讀、ん、で、知、る、べ、し、彼、れ、が、實、歷、の、大、
 略、は、此、の、如、し、而、し、て、其、の、系、統、は、如、何、請、ふ、下、に、掲、ぐ、る、彼、れ、
 が、系、譜、を、見、よ、

系 圖

良門 閑院左大臣冬嗣公第六子。内舍人正六位上贈太政大臣正一位、

利基 從四位上古中將

兼輔 從三位號堤中納言歌人
 雅正 從五位下刑部少輔

爲頼 從四位下大皇太后宮亮
 母右大臣定方女

頼成 從四位下因幡守實具平親王男
 爲時 正四位下越後守或云越前守、儒者歌人、

惟親 從五位下式部丞母常陸介爲信女

惟通 從五位下安藝守

定暹 阿闍梨

女子 紫式部

第二章

式部の性行

人にまだ折られぬ
ものを誰れかまた

平安奈良
兩朝に涉
れる道德
の紊亂

驕恣、浮華、誇耀、文弱、これ王朝の特有物なり、恃德、倫亂、好色、華奢、これ王朝の生産物なり、銀鞍馬に跨がるの公孫は、花晨月夕に狂奔亂舞し、花帽、紬衣の月郷雲客は、青山白水に吟歌朗詠す、一片の艶歌、或は穴隙を鑽り、或は想思を寄す、平安奈良兩朝に渡れる、道德の紊亂は、卷を覆ふて讀むに忍びざるものある也、嗚呼、上流既に濁れり、豈に下流の清きを望まん耶、

泥土に染
まぬ白蓮

滔々たる天下、相率ゐて皆之に陥ある、屈原の所謂世を擧げて皆濁れるもの、吾人之を王朝に於て見る也。
式部不幸にして、此かる混亂極りなきの世に生まれ、晨に箏笛歌舞の聲を聞き、夕べに醜語鄭聲の淫を耳にし、見るとして、驕恣、浮華、誇耀、文弱の極ならざるは靡く、聞くとして、恃德、倫亂、好色、華奢の至ならざるは莫し、此の渦中に投ぜられたるの彼は、其の習俗に感染せざらんと欲するも、得ん耶、而して彼は遂に此の濁流に處して、其の通弊に陥いらざりき、寧ろ濁流を排して、泥土は染まぬ、白蓮の如くに。
式部を以て才德備はらざる者となすは、式部を知らざるも

彼の一代は雪の如く花の如し

男兒の謀畧往々闔房の中より破る

の、言のみ源語を解せざるもの、言のみ世の式部を見るもの、只源語の皮相を觀察して、式部を臆側するものあり、是れ豈に彼を誤解するの甚だしきに非ず耶、彼は藤壺の如く、然かく亂倫者にあらず、彼は六の君の如く、然かく淫奔者にあらず、將た源内侍の如く、然かく好色家にあらず、彼の一代は雪の如く、高潔、花の如く、純美也。

夫れ女性に嫉妬深くして、驕誇甚だしき者也、之を以て彼の生意氣に流れざるもの、殆んど稀れ也、男兒の謀畧往々にして、闔房の中より破ぶる、女賢かしうして、牛賣り損ふの卑諺は、明らかに女性の胸中を照破せる、千古の鐵案にあらず耶、

女性の弱點を打破したり 15

既に人あり、女無かるべからず、既に女あり、此の性無かるべからず、是を以て、謙讓を歸徳の第一とせる、支那に於てすら、牝鶏の告晨を以て、拒ぐに至難なる、惡徳となせしにあらず耶、

女性既に然りとせば、學古今に涉り、博く諸藝に通ずるもの、誰れか其の學に誇心なく、其の藝に慢意なからん耶、况んや才學共に秀いでたる、式部の如きに於て、をや、而して彼の世に處する、極めて謙讓能に誇らず、藝に慢せず、靜肅鄭重、己れを持せり、彼は至難なる婦徳を以て、容易に之を實行せし也、彼は凡べての女性が抱持せる弱點を打破して、自づから信

ずる所を行ひし也、嗚呼、彼れも亦千古の女傑なるかな、吾人をして今如何に、彼れが讓徳を全ふせしかを見せしめよ。

式部がありさま、かゝるめてたきこといも、つゞり出したる人ともあほへず、裳からきぬきたる姿やうだいもてなしなど、いとあやしう、心もとなげにぞ侍りける、(今昔物語)これ宛然、彼れが態度を、目撃するが如きにあらず、耶、締りたる朱唇は、堅く閉ざして、發せず、遜色ある黒瞳は、絶えず下視して、戦々中宮に入りたるの光景は、今も尙ほ人をして想するに餘裕あらしむ、彼れが謙遜自づから處したるの跡は、其の日記を讀んで知るべし。

うちのうちの源氏の物語、人に讀ませ給ひつゝ、聞こし召しけるに、此の人は日本紀をこそよみ給へけれ、まことに才あるべしとのたまはせけるを、ふと推しはかりに、いみじくなんさえあると、殿上人などに言ひちらして、日本紀の御局とぞつけたりけるいと、おかしくぞ侍ること、故るさとの女の前にてだに、つゝみ侍べるものを、さる所にてさえさかしいで侍べらむよ、この式部(唯親)といふ人のわらはにて、史よみ侍べりしとき聞きならひつゝ、かの人はをそを讀みとり忘るゝ所をもあやしきまでぞさどく侍べりし

かば、史に心いれたるおや(爲時)は口惜しう、おのことにてもたらぬこそ、幸ひなかりけりとぞ、常になげかれ侍べりし、それを男だにさえかりぬる人は、いかにぞや、はなやかならずのみ侍へるよと、やうく人のいふも聞き留めてのち、一といふ文字をだに書わたり侍べらず、いとてづゝにあさましく侍べり、讀みしふみなどいひけん物、めにもとめずなりて侍りしに、いよ／＼かゝること、聞き侍べりしかば、いかに人も傳へ聞きて、憎むらんと、耻しきに御屏風のかみに、かきたることをだに、讀まぬ顔をし侍べりしを、宮の

忍びて樂府を授く

孔雀は美の爲めに捕はれ黄 19

おまへにて、文集の所々、讀ませ給ひなどして、さるさまのと、しろしめさせまほしげに、おぼいたりしかば、いと忍びて、人のさむらはぬもの、ひま／＼に、をとしの夏頃より、樂府といふふみ、二卷をぞ、しどけなくかう教へたて聞こへさせはべるも、かくし侍べり彼の才に誇こらざるごと、大概此の如し、忍び／＼て、樂府を授けたるが如きは、到底方今束髮流の才女が夢にだも思はざる所なり、孔雀は其の形の華麗なるが爲めに捕はれ、黄鸝は其の聲の美なるが爲めに、往々命を落とすことあり、宇宙の最美とま

で稱せらる女性に至つては、其の美の爲め、豈に身を誤やま
るなしとせんや、况んや才色兼備せる式部の如くにして、而
かも早く良夫に別れたるものをや、其の節を全うするを得
るもの殆んど希れ也。
果然、彼れは外物の襲撃に遭ひぬ、而かも節操、鐵より堅き、彼
れは遂に其の身をして花の如く雪の如く高潔ならしめ、た
り記に曰

源氏の物語あまへにあるを、どの(道長公)の御覽じて、
れいのすゝろごとくも、いできたるついでに、梅の枝
にしかれたる紙にかゝせ給つる、

すきものと名にし立れば、みる人のおらで過ぐるは
あらじと思ふ
の給せられたれば、
人にまたおられぬものを誰れか此のすきものぞと
は口ならしけん
めざましうと聞こゆ、渡殿にぬたる夜、とを叩く人(道
長)あり、聞けどおそろしさに、音もせで明かしたる、つ
とめて
よもすがら水鶏よりげになく、
ぞ、槇のどぐち
に叩き侘づる(新勅)かへし
たゝならじとばかり叩く水鶏ゆゑあけては如何に、

口惜しからまし(全)

道長は寛弘五年四十三歳を以て式部の容色に心を動かし越えて六年煩腦の羈束絶えずして心を盡くしたれども節操堅固なる式部は遂に之を退けたるなり

源氏物語りの好色なるを以て人或は彼れを目して教育に盲なりしと誹るあれど彼れは決して教育に妄ならず淫奔の多く深窓佳人を害するを知れり

姫君のおん前にて此の世なれたる物語を読み聞かせ給ひそそつと心付たるものゝ娘などはをかしどにはあらぬどかゝること世にはありけりと見給は

んぞゆゝしきや

これ豈に當時淫奔なる物語類を以て害毒ありとして退けたる彼れが志にあらざや

第三章

源語著作の時代

みる人も嵐に

迷ふ山里に昔おほ

ゆる花の香ぞする

艶麗なる源語著述時代は果して何れなる乎是れ疑問也傳ふる者曰く村上天皇の十の宮選子内親王上東門院(一條帝女御)に仰せ珍づらしき物語類無きやと問はせ給ふ上東

門院即ち式部に之を書かせ給ふ、これ所謂源氏物語なり、此の時式部命を拜し、著述の成效を祈らんが爲め、石山寺に參籠通夜せしに、頃しも八月十五の夜なりければ、月光湖水に映じて、金波銀波を動かし、満目の光烟千里拭ふが如し、此に於いてか、式部が錦心繡腸涌き、物語りの風情歷々として心に浮かぶ、即ち佛前大般若經の料紙を取つて、心の往く處に任かせて、須磨、明石の巻を一氣呵成せり、是に於てか、彼が名聲、湖光と共に赫々たりと、

人口に噂
突せる俗
説

是れ源氏物語著述の手續として、誠に面白き事實なり、然りと雖ども、これ只人口に噂突せる俗説耳、源語の著、豈に石山

源語著述
の時代

に於いて爲されたるものならん耶、此の説の如くんば、源語の著述は、式部が上東門院に入りてより、後の作ならざる可からず、然るに其の以前既に源氏物語なるもの、在りて存するを奈何せん、彼の今昔物語りに、かゝるめでたきものどもと云へるは、源氏物語を指せしにあらずや、然らば彼れが中宮初參の時は、既に源語の存せしや明らかなり、此を以て、源氏物語り著述時代は、彼れが宜孝に後くれてのち、宮殿に入るまでの間に於いて書かれたるなりといふ、諸家の説、確實なるもの、如し、即ち長保の終りより、寛弘の始めに至る數年間、これ也、當時彼れが年齢、殆んど三十有餘な

るべし

これ彼れが沈黙考の時代なり、これ彼が靜心隔世の時代なり、又これ彼れが安養閑居の時代なり、彼れ所謂社交なるものを捨て、超然世外に脱塵し、炬の如き眼孔を以て、宇宙の眞理を觀察し、遂に發して洪翰なる、一部源語となる、故に彼れが著を一誦するものは、始めは惟貴族的氣象、富貴的温和のみを認むべし、而かも再三再四其の眞意を味ふに至りては、或は山林出世あり、或は市井田家あり、或は貧困哀傷あり、或は閨怨人情あり、王朝の狀態、歴々描寫して、餘蘊あるなし。彼は身を世の濁流に投じて、而して自から清くせり、彼れが

身邊は盡く、驕姿浮華なり、彼れが周圍は盡く、悖德亂倫なり、此の間に處したるの彼れは、勢ひ世と相戦はざるべからず、彼は戦へり、而かも勝を制する能はざりき、滿腔の不平發して、金聲玉振の源語となる、此を以て彼れの作中、往々世を嘆き、時を諷するの文字、散出するにあらず、耶、惟彼れは女子的性格を保たんが爲め、婉麗優美の中に、些の圭角を挿さみたる耳、是れ彼れが驚くべき筆力の存在せる所以にあらずや。人は時勢の産出兒なり、戰國の孟軻に於ける、革命時代のカライルに於ける、近くは我國維新に於ける、勤王諸士の如き、皆是れ時勢が産出せる寵兒にあらずや、世亂而忠臣顯の

源語は王朝の野に於ける大なる革命の聲なり

一語明らかに此の眞理を説明するものゝ如し、式部は王朝時勢の産出見なり、天下滔々胥恣浮華に趨くの當年、彼は四顧右盼慨然たらざるものなく、鬱勃の情發して、五十四帖となる彼は無遠慮に女子の性質と其の缺點とを擧げたり、彼は憚りもなく、當時貴顯の華驕と怠惰を罵れり、而して彼れは又極言廷臣の輕薄、我儘を嘲けりたり、嗚呼、式部果して時勢の産出見なりとせば、其の源語は又時勢の産出物ならざるべからず、式部既に王朝風俗の革命に意ありとせば、閑富精妙なる源氏五十四帖は、王朝の野に於ける大なる革命の聲也、古評に曰く

此の物語、自然と人の好める色をつり糸にして、普ねく世の人に弄ばしめ、明君の興り給はん時まで、殘こしといめんの志なり云々

知己を千歳に求む

彼は己を千歳に求めたるなり、又曰く

此の物語表に云ひにくきことわりを書けども、實はさることにあらずして、順徳院の日本の至寶と云ひたる誠に穿てりといふべし、式部よろづの事、末になりゆけば、上代の美風の衰ろへ、俗に流れんことを憂ひたれども、正しき書は人厭いて讀まず、故に只好色の戯れごとにして、(中略)人情を委しく説かん爲め、人倫にもとれる

やう見ゆれど、全く時勢のうつりゆくさまを記せるな
り云々

嗚呼、此くの如にして源語は作られたるなり、宜なるかな、諷
世の意、紙面に躍如たるや、是れ一方より見れば、極めて彼れ
が非を庇ふが如くなれ、其彼れが時勢と彼れが性行とに由
つて、觀察すれば、無根の事とは云ひ難し、源語中には往々亂
倫の處行すら、挿入せることあり、之を以て式部の缺點とし
て、彼を非難するものは、これ多く、彼を解せざるもの也、

我かくてうき世の中にめくるとも誰かは知らん月の都に 浮舟

月だにもよその浮雲へだてずば夜なく、袖に宿しても見ん 齋院
浦風やいかに吹らん思ひやる袖打ちぬらし浪まなきころ 紫上
逢ふ坂の關やいか成る關なればしげき嘆の中をわくらん 空蟬
雪深みみ山の道は晴れずとも猶ほ行き通よへ跡絶ずして 明石
手に摘みていつしかも見ん紫のぬに通ひける野邊の若草 源氏
打捨てしつがいさりにし水鳥の此の世にたちあくれけん 八宮

第四章

式部が愛に對する理想

めぐりあひて

見しやそれとも分かぬ間に

雲がくれにし夜半の月かな、

人世の蹉跎、詩人をして悲觀厭世に陥らしむるもの、古今皆然り、屈平の如き、東野の如き、バイロンの如き、ミルトンの如き、これ也、彼れ等は、自づから遭遇せる悲觀に依つて、塵世を惡魔の生存所とまで排するに至れり、式部の世に於ける、又此の如き、莫きを得ん耶。

彼は人世に於て、愛の絶望者なり、彼は其の良夫と婚し、鴛鴦情濃かならんとして、良夫既に永眠、人世悲哀の一頓挫に遭遇せり、悲觀之より甚だしきは無く、厭世の情豈之より起らざらんや、况んや彼れ多血多涙なるに於てをや、况んや彼れ佛典經疏を讀み、厭世の要素既に存するあるに於てをや、味

きなき浮き世を觀じ、かげろふの身の定めなきを感ずるは、固より其の處なりけるなり、彼は飽かぬ戀に向かつて、同情を表したり、彼は協はぬ戀に向かつて、同感を現はせり、多情多血なる彼れは、到底愛情を以て人間最大の性格なりと確信せり、彼れが絶大の文章は、愛の花ならざるなく、彼れが人世に灑ぐ涙は、都べて愛情の爲めならざるは無かりき、天に在つては星、地に在つては花、而して人に在つては愛、嗚呼、愛は人生の尤も美なるものなり、慧眼なる式部は、早くも之を探つて、人生を歌ふの最大要具とせり、其の源語の全部

彼が著述は愛の結合に外ならず

は、遂に此の愛情の變化動搖に外ならず、彼れが名譽の大半は、殆んど愛情の操縦にあるものゝ如し、空蟬の身を變へたるを啣ちける人心あてにそれかと思ひ違がへの人、朧月夜にあこがれ給ふ人、或は月のすむ雲井をかけて暮ふたる、扱ては恐ろしき物の怪となりて出でたる、何れかこれ愛情の變化ならざる、彼れが一部源語は愛に依つて終始し、愛によつて行動し、愛によつて活躍たるなり、一言以て之を蔽へば、彼れが著述は所謂愛の結合に外ならざるなり、彼れは惜しかに愛を以て人情の至美を寫すべしと信じたり、而して彼れは又愛の何物たるをも併はせ知れり、其の愛の

愛は苦しきが故に樂しきなり

何物たるを知ると共に、彼れは又人生に對する悲觀を知れり、夫れ愛は苦しきが故に樂しきなり、苦しからざるの愛は比較的樂しからざるなり、又愛は樂しきが故に苦しきなり、樂しからざるの愛は比較的苦しからざるなり、彼れは能く此の眞理を了知せり、是を以て彼れが愛を描くや常に苦しき愛を描けり、これ彼れが愛に對する理想なればなり、今試みに源氏五十四帖に於ける、在らゆる愛を檢し來らば、恐らくは思ひ半ばに過ぐるものあらん、飽かぬ戀、果敢なき戀、遂げぬ戀、これ所謂苦しき愛にあらず

耶、其の他障[○]碍[○]ある戀[○]別[○]かるゝ戀[○]頼[○]みなき戀[○]等の如[○]き、皆[○]此[○]の類[○]也、悲[○]中[○]の快[○]觀[○]果[○]して眞[○]理[○]な[○]らば、苦[○]中[○]の愛[○]にも、又[○]快[○]味[○]を[○]含[○]有[○]せ[○]ざ[○]らん耶、

今[○]試[○]み[○]に[○]兩[○]親[○]の[○]許[○]可[○]を[○]得[○]て、相[○]思[○]の[○]佳[○]人[○]才[○]子[○]が[○]波[○]瀾[○]な[○]く、憂[○]慮[○]な[○]く、平[○]々[○]坦[○]々[○]と[○]して、鶯[○]衾[○]蝶[○]夢[○]を[○]結[○]び[○]た[○]る[○]と、男[○]女[○]の[○]兩[○]者[○]が[○]人[○]目[○]を[○]忍[○]び[○]世[○]に[○]隠[○]く[○]れ[○]て、或[○]は[○]逢[○]は[○]ん[○]と[○]して[○]逢[○]ふ[○]を[○]得[○]ず、或[○]は[○]通[○]ぜん[○]と[○]して[○]通[○]ず[○]る[○]を[○]得[○]ず、轉[○]々[○]反[○]側[○]し[○]て、苦[○]悶[○]憂[○]慮[○]す[○]る[○]と[○]を[○]比[○]較[○]し[○]見[○]よ、如[○]何[○]に[○]前[○]者[○]の[○]趣[○]味[○]な[○]く、快[○]味[○]な[○]く、平[○]穩[○]な[○]る[○]に[○]引[○]き[○]か[○]へ[○]て、後[○]者[○]の[○]趣[○]味[○]多[○]く、快[○]樂[○]多[○]く、哀[○]れ[○]多[○]き[○]ぞ、是[○]れ[○]前[○]者[○]に[○]在[○]つ[○]て[○]は、愛[○]は[○]既[○]に[○]靜[○]靜[○]に[○]復[○]し、後[○]者[○]に[○]在[○]つ[○]て[○]は、愛[○]益

愛の靜靜と動靜

すゝ其の活動を極むべければ也、

彼は常に愛の發作を説き、及び其順序を説けり、而かも其の愛をして、常に飽かぬ戀、協はぬ戀、遂げぬ戀、若しくは障[○]碍[○]ある戀となし、終はらしめたり、

意の如き
愛は廣漠
千里の平
原に似た
り

樂[○]し[○]き[○]愛[○]意[○]の[○]如[○]き[○]愛[○]は、譬[○]へ[○]ば、曠[○]漠[○]千[○]里[○]の[○]平[○]原[○]に[○]似[○]た[○]り、行[○]路[○]の[○]難[○]な[○]く、苦[○]身[○]の[○]憂[○]ひ[○]無[○]し[○]と、雖[○]ど[○]も、人[○]誰[○]れ[○]か[○]其[○]の[○]モ[○]ノ[○]ト、ノ[○]ス[○]に[○]飽[○]か[○]さ[○]る[○]あ[○]ら[○]ん、飽[○]か[○]ぬ[○]戀[○]、協[○]は[○]ぬ[○]戀[○]、障[○]碍[○]ある[○]戀[○]は、譬[○]へ[○]ば、峻[○]山[○]斷[○]崖[○]の[○]如[○]し、崎[○]嶇[○]羊[○]腸[○]と[○]して、足[○]を[○]傷[○]む[○]る[○]甚[○]だ[○]し[○]く、時[○]と[○]して[○]は、身[○]を[○]戰[○]慄[○]せ[○]し[○]む[○]る[○]程[○]の[○]深[○]谷[○]に[○]臨[○]み、時[○]と[○]して[○]は、言[○]を[○]して[○]重[○]た[○]し[○]む[○]る[○]程[○]の[○]憂[○]鬱[○]を[○]仰[○]ぎ、甚[○]鬱[○]鬱[○]あり、

彼れの後
世稱揚せ
らるゝ所
以

雖ども、山高く、月小なる佳景あり、水落ちて石出づ底の風流あり、其の快味謂ふべからざるものあるにあらず耶、是を以て式部が愛を描くや、圓滿平原の如き愛は絶えて無く、煩腦の山嫉妬の海、崎嶇羊腸たる峻嶮なる愛のみ、これ彼れが手段なり、是れ彼れが本領なり、彼れの詩が後世に持ては、やされ、彼が手腕は後世に稱揚せらるゝ所以のものは、此の手段、此の本領あるが爲めなり、嗚呼、戀の齟齬は、人情の極致なり、人世の波瀾は多く之れあるが爲めにあらずや、吾人が之を取つて早くも唯一の本領とせる、犀利炬の如き彼が眼光に驚かずんばあらず。

別れの
戀

今試みに吾人をして、彼れが戀に對する觀念を伺はしめよ、
「かたち勝ぐれ心さま優なる桐壺更衣は、帝の御寵めでたく、
極めて時めき給ふなるに、明けくれ物思ひに沈づみ給ふの
故を以て、遂に病に臥し、さどへ引き下がることゝせり、當時
帝の心中如何なりしぞ、所謂別かれの戀を描きて、讀者をし
て、遂に悲觀を誘はしめたり、

かぎりとして別かるゝ道の悲しきに

いかまほしきは命なりけり

これ更衣が當時の心情にあらずや

宮城のゝ露吹むすふ風の音に

小菟がもとを思ひこそやれ

これ帝がはかなき戀にあくがれ給ふ述懐にあらずや、彼は開卷先づ不如意なる戀を以て起こせり、而して此の更衣をして、病痾再び癒え、艶顔月の如く、帝所に歸へることを得せしめば、之れ圓滿なる戀となるなり、然れども此の如きは則ち式部の本領にあらず、此の愛をして益々悲觀を呈せしめんが爲めに、更衣をして遂に病死せしめたり、是に於いてか敢果なき戀は、愈よ悲嘆、痛苦を益すなり、御心地何事も思はず、分かず、御涙に暮れ給ふ帝の上に思ひ及ばし、讀者をして、嗚咽せしむるものある也。

彼れが本領

遂げぬ戀

彼の伊豫介が後妻空蟬に、源氏をして思ひを懸けしめたる、戀に對する一波瀾なり、空蟬をして何の苦もなく、源氏に従はしめば、遂に平穩なる戀となるなり、然れど源氏さまに、此に語らひ給ふも、其の甲斐なく、聞き入るべくもあらぬや、書きたるは、彼れが本領にして、洪嘆、憂慮、沈思等愛に於ける、凡べての場合ひを生み出だし來たるなり、源氏が空蟬に思を遂げんが爲めには、幾多の苦心と幾多の心遣ひとを要せしめたり、彼れが空蟬の小弟小君を語らふて、以て機會を得んと計るが如き、愛に於ける苦心經營、實に讀者をして、卷を措くを欲せざらしむるものあり、これ所謂遂げぬ戀を描き

て、戀をして益す／＼活動せしめんの手段なり。

はとき木の心もしらでそのはらの

道にあやなくまどひぬる哉

これ彼の源氏が遂げ得ぬ戀に對せる、怨言にあらざや、彼をして此の怨言を出ださしめてこそ、戀に對する眞理は説明せられ得るなり。

優さしき夕顔と仇なる夢は結びつれど、聒らひはづかにして、夕顔は遂に世を去りしにあらざや、此の敢果なき戀は、遂に源氏をして、懊惱病に臥せしむるに至り、如何に敢果なき戀ひの、人を腦殺せしむるかを説明せり。

比較上稍や完全なる戀を遂げ得しは紫の上なるべけれど、彼れは終始疑惑懸念等の波瀾を起こして、其の戀をして、坦々砥の如くならざらしむるに勉めたり。

源氏が彼の藤壺更衣に忍びて逢ひ給ふが如きは、愛の活動最も甚しきものにして、所謂愛の極點なり、人目を忍ぶこと最大の苦心なりと雖ども、此の苦中既に最大の快樂を含有せるにあらず耶。

六の君と忍びての戀は、同じく飽かぬ戀を説明せるものなり、其の催馬樂に托して、

石河のこまうどに扇取られて、からきくひする。

と諷ひ其の情をほのめかしたる如き、或は雨風の日几帳の内に身を隠くしたるが如き、何れか活躍せる戀情ならざる。六條御息所の伊勢へ下り給ふ心の中、如何に愛情の、其の内、に、憐、れ、た、る、あ、り、し、ぞ、

源氏の須磨へ下り給ふとき、紫の上の悲嘆痛感は明らかに、哀別の情を説明せしにあらざ耶、

をしからぬ命にかへて目のまへの

別れをしばし留めてしかな

死を嗜してすら、生別の哀情を醫せんとするか、如きは、愛の至美なるものなり、

敢果なき戀の説明者

旅ひ寐のつれづれに、わりなくなり給へる明石の上、源氏の召し返へされて京へ登り給ふときの心は、如何なりしぞ、これ敢果なき戀の説明者なり、源氏人々の心くらべと云へる書に

すまのわかれに、京にとまりて、いのちにかへて、おぼしけん、紫の上の御心と、源氏召し返へされ給ひしに、明石にとまりけん、明石の上の思ひと、いづれにてありなん、いのちにかへて嘆きける、かれは淺からぬ御心ざしを見しり、なをゆくすゑたのみけん、明石の上、身も數ならで、山がつのいほりに、心ほそき事さへまじはり、おやどもの思

ひみだれて、いかに思ひまさりけん、
 これ兩者に於ける愛の極度を比較したるものなり、今は只
 比較の要なければ、聊か兩者に於ける哀別の情を顯はさん
 が爲めに、記し置くなり、
 其の後源氏は京へ登ぼり、明石は松風怒濤を侶として、彼の
 海濱に、敢果なき戀の涙を絞ぼるさへ、愛の最も悲觀なるに、
 住吉に於て源氏と再會の機を得て、而かも戀々の情を洩ら
 す能はず、數ならぬ身の程を見えまつらんも、中々に知らぬ
 人よりも耻づかしとて、舟を難波に漕ぎ戻し、したるが如き、
 何等の悲觀ぞ、何等の絶望ぞ、

數ならぬなにはの事もかひなきに

なにみをつくし思ひをめけん

嗚呼愛情の敢果なきは此に至つて極まれり、而して讀者を
 して能く腸を寸断せしむる也、

源氏が玉蔓に於ける焦心最も甚だしく描けり、兼ねてより
 心を掛けて、さまざまに云ひ寄れど、絶えてなびくべき景色
 も見えざるは、源氏の焦心苦慮を裏面に寫つして、遂げぬ戀
 を説明せるなり、其の遂に鬚黒の大將をして、中原の鹿を捕
 へしめたるは、戀情の齟齬歴々指すべし、夕霧の雲井の雁に
 於けるも、相思をして中絶えしむるが如き、何等の遺憾ぞ、何

等の焦心を

世を捨てんと思ひたる薫中將が、句やかなる八宮大姫君を
思ふて忘れず、然れど姫君は、かやうのことたはぶれにも持
てはなれ給ふを以て、此の戀遂に成らず、哀痛遣る瀬なき戀
となし了んぬ

彼は不完
全の愛に
對しての
み同情を
表す

式部が愛に對する觀念の大略は右の如し、要するに彼は完
全なる愛を以て、人生至難のこといせり、彼れは圓滿なる愛
は到底得べからざるものと觀せり、彼は不完全なる愛に對
してのみ同情を表せり、源氏一部一言以て之を蔽へば、不完
全なる愛の説明に外ならず、不完全なる愛とは如何所謂遂

二様の意
味

げ、は戀、取果なき戀、障、碍ある戀、協はぬ戀の如き即ちこれ也
彼れが不完全なる愛の同情者たることは彼の經歷既に之
を默證するにあらず耶
然り彼れの一代は實に愛の不完全を經過し、實歴したるな
り、而して彼れの詩は熱心に此の愛の不完全を歌ふたる也
彼れが作の濃情紙面に滴るあるは、此の活動を描きたりけ
れば也
彼は復た此の不完全なる愛をして、二様の意味を持たしめ
たり、吾人は源語に於いて、容易に此の二様の意味を發見す
ることを得べし

吾人等時に美妙なる愛の一部に感觸することあれば、其の感觸は中心より發することあり、又外物の刺撃を受けて起ることあり、必ずや此の兩者の一に居らざるべからず、其の結果に至つては、或は秋毫の差違なからんも、其の動機に至つては大に徑庭あるなり、一は自己中心を以て、最大動機とし、他は外物の刺撃を以て、最大動機となす是れ也、靜止體に於ける愛には、此の如き場合は、少なしと雖ども、活動體に於ける愛には、往々之れあるにあらずや、試みに卷を開いて、源氏が未摘花に對する愛情の性質を研究せよ、源氏寵愛限りなき夕顔を失ふて、悲哀痛感措く能はず、夜深

く人定まるの時、沈思黙考、忘れんと欲するも、忘るゝ能はず、遂に彼は才色共に夕顔に等しからんものを、索めんと欲せり、偶、故常陸宮の姫君の事を話すものあり、源氏強いて之を得んと欲し、辛苦經營、遂に其の本意を達することを得たり、此の姫君は即ち未摘花なり、顔容共に醜、彼れが理想中に於ける夕顔に等しき美人とは似ざりけり、而かも彼れは遂に其の醜貌の故を以て捨てず、須磨に在る時すら、屢々彼れの上を思ひ及べり、是れ豈に外物の爲めに得たる愛にあらずや、其の藤壺に似たるの故を以て、紫の上を愛せるが如き、夕霧が雲井の雁に似たるの故を以て、惟光の娘を愛せるが如

き、薫中將が大君に似たるの故を以て、中の君を愛せるが如き、皆其の中間に介する所のものありて、然るにあらず乎。

第五章

源語の組織

惜しからぬ命にかへて
目の前の別れを

しばし留めてしかな

吾人が常に源氏物語を讀んで、式部の筆力自在なるに驚くは、主として彼れが巧みに構成せる源語の組織にある也。彼れが文章固より流麗婉美なり、彼れが理想固より幽遠高妙なり、然れども其の流麗婉美をして益す、流麗婉美に、其

の幽遠高妙をして、益す幽遠高妙に達せしむるもの、即ち源語構成の良組織にあらずして何ぞ。

極めて單一なる意義を複雑ならしめたり

彼の脚色は千編一律なり

源氏物語は極めて單一なる意義を複雑ならしめたり、彼の所謂不完全の愛を敷衍して、遂に人をして、混亂其の端を伺はしむる能はざらしめたり、戀愛の齟齬盡きて、又戀愛の齟齬出で、不完全の愛盡きて、又不完全の愛顯はる、要するに彼れが脚色は、千編一律なり、灘灘たる緑水、皎々たる白砂、何れかこれ、旅人の目を怡ばしめざる、撃々たる瀧響、颯々たる松風、何れかこれ、行人の耳を樂しましめざる、彼の緑水や、白砂や、瀧響や、松風や、共に自然

の美にあらざや、其の人目を怡ばしむるに於いて、無上の一なり。然れども若し之れ等をして、同じ光景を、幾回となく反復せしむるあるときは、其の反應果して何如んぞ。

人は變化を好むの動物也

も、白砂緑水を出で、又白砂緑水あり、彼れが旅中をして、白砂緑水のみを以て、一貫せしむるあれば、人誰れか其の奇なきに飽かざるあらん、白砂緑水、奇なきにあらざるも、其の排置既に奇なきを奈何せん、瀧響松風、快は即ち快なりと雖ども、瀧響松風盡きて又瀧響松風あり、彼れが行路をして、瀧響松風のみを以て、一貫せしむるあらば、人誰れか其の趣なき

組織の變化

脚色の弱點

に飽かざるあらん、瀧響松風、趣なきにあらざるも、其の排置既に趣なきを奈何せん。
式部が源語に於いて、用ゐる所は戀愛齟齬の一貫なり、彼は戀愛の齟齬を以て初め、戀愛の齟齬を以て結べり、是れ彼れが脚色に於ける弱點なり、讀者をして怡ばしむるに、極めて至難なる衝に當れり、而かも彼れが靈筆縱横、能く此の弱點をして、其の疵瑕を露出せしめず、讀者をして、巻を措くを欲せしめざるが如きは、吾人轉だ其の妙技に服せざるを得ず、これ其の組織の變化自在なると、文章の婉麗優美なるもの致す所なり。

設令奇なきの白砂緑水を踏むも設令趣なきの瀧響松風を
 聞くも時に沛然たる雨あり時に滄々たる雲あり或は鳥飛
 び蛙鳴き或は舟走しり山動き春は百花の繚亂秋は草露の
 團々溪流の潺湲虫聲の唧々此の如きの變化あらば白砂緑
 水瀧響松風の一貫は旅人の耳目に何等の厭情起らざる
 べしこれ其の排置以外に結構の極めて美なるものあれば
 也

彼れが源語に於けるも又誠に此の如し戀情の齟齬固より
 卷中を一貫せるの原素なりと雖ども彼れが結構組織の美
 遂に人をして飽かしめざるなり

秋景に白
 帆の點々
 たるを添
 ふ

今桐壺の卷に於ける全編の組織を観るに悲哀痛感人をし
 て酸鼻に堪へざらしむるを以て全編の骨子となせるもの
 の如し即ち桐壺更衣の卒去より帝の悲歎遣る瀬なきの情
 を述べ筆痕寂寞涙滴らんとするの状あり而して其の末段
 に至りて源氏の君と葵の上の双美を點し來たりて宛然秋
 景に白帆の點々たるを添へしめ前半の寂寞をして幾許か
 補遺せしめたるは彼れが組織上の一變化にあらずや
 寂寞たる悲慘の光景に亞ぐに霖雨瀟々たる夜を以てす誰
 れか層一層の寂寞を感ぜざるあらん然るに彼れは一轉し
 て瀟々たる此の夜を以て極めて快樂欣々たる夜會と變ぜ

り、所謂雨夜の品定め是れなり、之れ實に彼れが組織上の高妙なる變化にして、前編の寂寞悲哀を補はんが爲め、快詔を叙したる輕妙の筆致也、卷中彼れ等が會談の如何に面白く人を樂しましむるぞ、式部の丞が通ひける女の事を話して、或る時彼の女の家に至る、彼れ草藥を服したり、戸を隔て、云ふ、吾が口今日は臭氣あり、此の臭氣失するを待ちて、再び來れと云ひにきと謂ふが如きに至つては、何等の滑稽何等の抱腹ぞ、是れ彼の悲哀極り無き桐壺の卷に亞がしめたる掃木卷にあらざや、其の空蟬の卷に至つては、人違ひの奇談を出だして、先づ讀者をして茫然たらしめ、其の茫然たらし

むる間に於て、彼れが本領たる戀を説明せるなり、枕邊にからくくと鳴る神に等しき、唐臼の聲を聞く、田舎の風景、既に凄さまじきに、御息所の怨靈を出だして、腥風紙端に洩ばしらしめ、人をして毛髮立たしむるの怪談を描き、一轉遂に愛女をして、秋風と共に塵世を去らしむるの悲境に入る、彼の掃木空蟬の兩卷に反映して、悽愴は愈よ悽愴に、悲哀は愈よ悲哀也、(夕顔卷)
此の悽愴悲哀の卷に亞ぐに華麗なる若紫の卷を以てせり、可憐なる紫の上を點し來たりて、驟雨一掃の後、光風霽月を見るの想ひあらしむ、設令一世の悲哀に慟哭したるものと

雖ども可憐なる頭是なき小兒の破顔微笑するを見れば誰れか涙を隠くして一笑せざるものあらん耶此の無罪なる若紫の巻と之に亞げる滑稽的末摘花巻とは相共に前編の懐愴を補ふに足れり而して又此の氣樂なる兩巻に亞ぐに紅葉賀花宴の兩巻あり一は懐婉の光景を叙し他は春風の駘蕩を寫つす兩々相對して光輝頗る見るべし花に眠むり月に醉ふ前編二巻は讀者をして又歌伎舞曲に飽かしむるの憂ひあり此に於いてか懐愴悲哀なる葵の巻を以て之に亞げり加茂祭日に於ける車の争鬪は遂に又御息所の怨靈とならしめ葵の上遂に黄泉の客となりぬ哀別

の情嫉妬の活動都べて懐愴悲哀を混亂して前兩巻を補ふ春月朦朧として烟ふるが如く夜風颯々として人の袂を拂ふの時畫欄朱廊の下美人出で美男出で軟語切々たるが如き何等多情の光景ぞ其の想思相通じて入目を忍び相會して腰語を洩らすが如き何等濃情の嬌態ぞ榊花散里兩巻に渡れる春風駘蕩の意は前段葵の巻の懐愴悲哀を受けて後段須磨明石の兩巻を出だす準備とはなれり配所の月に對して獨り箏を彈じ最愛の佳人に生別して思ひを曲浦の浪に寄するが如きは須磨の巻に於ける最大悲觀にあらずや鴛鴦の契りも束の間にて再び生別となつて

苦悶憂慮するは、明石の巻の哀痛にあらずや、

源氏の再び京へ歸ることを得て、愁眉稍や開らけ、舊の如く華麗相往來し、舊情を温尋する如きは、潯標巻に於ける、喜悅にあらずや、蓬草庭に満ちて、八重葎軒を埋むるの裡、隱語の喃々たるは、蓬生巻に於ける、再會にあらずや、嗚呼須磨の悲觀、明石の哀痛あり、亞ぐに潯標の喜悅、蓬生の再會を以てす、其の配合宜しきを得たりと稱すべし、關屋繪合の兩巻の如き、大に其の興を助けて、怡々滿悅の意を含まじめたり、而して此の喜悅快樂に亞ぐに、彼れは又松風、薄雲の兩巻を以てせり、兩者共に親子の別情を叙して、紅淚襟を濕すものあり、

喜悅と再會

趣味更ら
に一轉す

嗚咽泣涕に堪へざるものあり、前數巻の輕快と相對して、頗る讀者を満足せしむ、其所謂朝顔巻に至つては、趣味更らに一轉して、讀者又其の奇趣に驚くべし、乙女巻の如きは、奈何ん夕霧、雲井の雁の生立より、戀情の發達を叙し、全篇をして、寂寞の意無からしめんと、勉めたり、源氏が四季の庭を造くつて、愛姫をして盡く之れに居らしむるが如き、何等の快事ぞ、而して又之に亞ぐに、玉蔓の巻を以てす、巻中載する所は、先づ玉蔓が幼時筑紫に下りて、孤兒の哀れなる狀況を叙し、長ずるに及んで、太夫の監に思ひ込まれ、脅迫強談を受け、危機一髪、人をして手に

汗を握きらしめ、辛くして京に逃げ上ぼるの危険を寫せり、此の間の玉蔓が心中如何ありしぞ、讀者をして艱苦千辛を想見せしむ、之に亞ぐに初音の閑情、蝴蝶の優美、螢の嬌痴、常夏の艶體、あり、篝火、野分、御幸、藤袴等の雜興あり、讀者をして殆んど應接に追あらしらしむ、然れども眞木柱巻に至り、組織爰に一轉し、大ひに讀者の腦を刺撃するにあらずや、鬚黒大將が北方物の怪の爲めに狂態を演ずるなど、正にこれ波瀾穩やかなる、太平洋上に黒烟天を衝くの奇觀を望むが如し、梅か枝藤の裏葉、若菜上下共に非凡の組織に非凡の趣向を兼ねた

り、其の柏木、横笛の兩巻に至つては、思ひあびて世を捨て、尼になりたる女三の宮の身の上、浮世の義理に、此の世を早くせる、柏木が哀れ、凡て凄絶、悲絶の境域を叙し、亞いで鈴虫夕霧の兩巻に至り、夕霧大將が落葉の宮に對する戀情を描寫し、讀者の腦裡、一陽來り復せんとするとき、忽然として御法の巻出す、吾人茲に至つて愈よ、彼れの筆力、神の如きに驚かす、んばあらず、ぞ、すれば風に亂る、救の上露、嗚呼、これ御法の巻に於ける紫の上の病躰にあらず、耶、巻中の愛女として、讀者の腦

裡に欣喜哀痛を印せしめたるの彼れは今や無情の風に誘
 なはれたり満宮の悲哀慟哭卷中恐らくは比なかるべし其
 の特に掌中の珠を奪はれたる源氏が心中に至つては如何
 追慕哀別の情交も誘き全篇字々涙痕ならざるなし其の餘
 哀旋いて幻の巻に至る曼荼羅供養の如き何ぞ夫れ哀痛悲
 感なる
 卷中悲絶哀絶の極は恐らくは紫の上が卒去なるべし讀者
 此に至つて既に茫然たり此の悲絶哀絶の後に於いて彼れ
 は又更らに悲絶哀絶の一事を畫かざるべからず何ぞや源
 氏の君の薨去これ也彼れが源語の組織上紫の上の死に嗣

彼は如何なる筆法を使用せし乎

いで源氏の薨去を寫つすは自然の然らしむる所にして是
 非とも此の一事なかるべからず然りと雖ども人は變化を
 好むの動物也人はモントリスを忌むの動物也紫の上の
 死既に悲しむべし之に嗣いで又源氏の死を寫さん歟是れ
 悲哀に亞ぐに更らに悲哀を以てするなり此の如きは組織
 の最も拙なるものにして人をして飽かしむるの憂ひあり
 慧敏なる式部は既に能く之を看破せり而して彼れは源氏
 の薨去を以て彼の紫の上の死に嗣がしむるに如何なる筆
 法を使用せしがこれ趣味ある研究也
 式部の筆力を以て源氏が薨去を描寫せしむれば悲哀更ら

に御法の卷より甚だしきものありしならん而かも彼れは
遂に之を描かずして唯雲隱の卷名のみを留めて源氏が薨
去を無言の裡に知りしめたりこれ彼れが組織の最も卓越
したる伎倆にして又最も人を驚かしむるの變化なり彼れ
が靈筆能く言ふ能はざるにあらざる言へば人を泣かしむ更
らに甚だしきもの有るを以てに非ず耶

百尺竿頭
更らに一
歩を進む
るもの

句宮以下更らに筆法を新にし薰大將の姿を寫す百尺竿頭
更らに一步を進むる者也紅梅の春姿竹川の艶陽これ豈に
前段の悲痛を補ふの兩篇にあらざるや月下琵琶を彈するの
美人を望み心恍惚たる如きは橋姫の卷に於ける薰中將に

あらずや其の椎本の卷に至りて八の宮の取果なき死を叙
し幾許かの悲境をほのめかせり總角の卷は句宮薰大將が
戀情を詳説し春風薫心艶花亂るゝの光景あり而して其の
總角の末段より早蕨の一篇を通じて再び寂寞の意を寫す
せり宿木より夢の浮橋に至るまで悲喜相錯して遂に此の
卷の結了に至る
要するに彼の源語に於ける組織を観るに喜の後は必ず
悲あり悲の後は必ず喜あり全篇を通じて秋毫も之を誤
まる莫し是れ實に彼れが組織上に於ける用意周到なりと
らふべし

再び源語を按ずるに、全編大葉の組織を分かつて、二段となすべし、一は源語の前編とも稱すべきものにして、光る源氏の傳記これ也、他は源語の後編とも稱すべきものにして、兼中將が傳記是れ也、其の前編は桐壺の卷を以て起こり、竹川の卷に終はる、其の後編は所謂宇治十帖と稱するものにして、橋姫の卷を以て起こり、夢の浮橋に至つて歇む、今其の前編と後編との結構排置を見るに、大に其の性質を異にせり、彼は其の大組織に於ても既に一律を避けんとせり、今試みに之を比較せば、

(一) 其の前編と稱すべきもの(光源氏の傳記)の特異なる點、

- 一、舞臺、此の編に於ける出來事は多くは宮中若くは都大路を以て舞臺となし、範圍極めて廣きこと、
- 二、主人公、其の大なる主人公は、位人臣を極めて、世に時めき、極めて自由なる身にして、最大幸福の人なり、
- 三、愛、此の編に於ける愛は、のどやかに説明せられたり、
- 四、光景、凡べて華やかなるが多くして、寂びしきが寡なり、
- 五、人物、愉快滑稽等の人物あり、其の數も多くして、異様なり、

六家、大家朱門金殿玉樓多くして、燦然たる色、目を驚

かさの有機、軒廊で宮殿の光景華やかなり、

(二) 其の後編と稱すべきもの(肅大將の傳記)の特異なる點、

一、舞臺、此の編に於ける出來事は多くは片山里の寂

寞たる地を以て、舞臺となし、範圍極めて狭まし、

二、主人公、其の大主人公は人世の蹉跎を感じ、己れの

身を嘆き、遁世家を出でんとまで覺悟したる不幸の

人なり、其の大主人公は、

三、愛、此の編に説明せる愛は極めて急迫なり、

四、光景、凡べて寂びしきが多くして、華やかなるが寡

なし

五、人物、愉快滑稽等の人物絶えてなく、且つ人の數も

寡なくして、同種のもの多し、

六家、大厦高樓の美なるなく、荒涼寂寞たる天地多く

して、凡べて山家の風色、沈み勝ちなり、

其の異種の太略を摘記すれば右の如し、若し精密に之を觀

察すれば他に尙ほ多くの異點あるべし、要するに其の前編

は華麗優美にして、後編は冷靜沈痛なり、前編をして春光た

らしめば、後編をして秋景たらしむべし、これ華美と荒涼と

相反映して、全編の美をなす所以にあらずや、

彼の奇構として時に吾人の感嘆措かざる所は如何なる混雑を記するも秩序井然として亂れざるの一事これ也見よ源語中に於ける多數の人物盡く其の名を顯はさずして(勿論惟光の如き二三の取り除けはあれど何の守若くは何の中將といふ如き官名を以て之に當て混亂極りなきも讀者をして毫も其の不都合を感ぜじめざるは組織結構の致す所にあらずや其の須磨と云ひ明石と云ひ紅葉の賀といひ花の宴といひ薫中將と云ひ匂の宮といふが如き兩個の好對を取つて結構に美觀を添へしめたる何等絶妙の靈筆をや

第六章

源語に於ける「人」

山風に霞吹きさるる
こゝろはあれと隔てし
見ゆるなちの白波

式部が源語上に顯はれたる「人」なるものは彼れが脚色の單純なるが如く單純なり彼れ等は殆んど同一の性格を有し殆んど同一の境域を踏み殆んど同一の結果に終はる巻中活動せる人物算じ來れば管に數十人のみならずと雖ども所詮其の通有する所の性ありて之を一貫せるもの、如し其の多血多情なる其の悲觀厭世の感を懷きたる其の殆ん

物の哀れ

彼等凡て感情的也

と作者を髣髴せしめたる多き其の貴族的人物なるが如き、皆これ各卷至る所に得難からざるものなり而して其の彼れ等を貫通せる主なるものは物の哀れこれなり、
 『物の哀れ』の同情者たることは實に彼れ等の通有性なり、是れ多血多性なる彼れ等の性、悲觀厭世の彼れ等が感愴より來たる所のものにして殆んど全卷人物を通して此の性を有せざる無し一言以て之を蔽へば彼れ等は都べて感情的なり然り極めて脆弱に感情的なり彼れ等は宇宙の萬物に對して物の哀れを感觸す其の花に對し月に向かひ鳥を看虫を聞くも彼れ等が腦中に感觸する所は所謂物の哀れ

式部が描ける人物

浮舟

也、
 彼等の中には崇高の意味に於ける人物なく眞摯の意味に於ける人物なし唯女性若くは女性に等しき男兒の活動するあるを見るのみ彼れ等は愛の爲めに生まれ愛の爲めに死せり彼れ等は愛を以て最大の目的名譽となせり要するに式部が描ける人物は社會の半面に於ける人物なり請ふ吾人をして其の第一例として
 (三) 浮舟
 を取らしめよ夫れ浮舟は八の宮の脇腹に生まれたる娘にして常陸の守の養女とはなれるなり彼れが門地賤しから

ざるに、其の常陸守の養女に下れるを以て、左近の少將にす
 ら、縁談の拒絶を受けたり、堂々たる宮家の息女にして、其の
 姉君たる中の君は、金殿玉樓に住み給ひ、時めき給ふ有り様
 なるに、彼れは只田夫野人の如き、常陸守の娘となり、無念更
 らに遣る方なかるべし、是れ彼れが心中既に悲觀を感じ、萬
 物に對して、物の衰れを感觸するの動機となれるにあらず
 や、其の肅大將のありなき、情意にほだされて、天縁を契さる
 に至り、圖らずも句の宮の戀慕に逢ひ、深夜に乗じて、肅大將
 と誤まり思ひ、遂に情を通ぜしより、浮舟の身上遽かに憂苦
 の深淵に沈落せるにあらずや、浩潔なりける彼れが節操は

既に、摧けたり、純清なりける彼れが婦徳は既に廢たれたり、
 假令一時の過失に出でたりとは云へ、彼は既に俯仰天地に
 愧ぢざるの人には、あらずりけり、薫に從はんか、句宮を奈何
 にせん、句宮に從はんか、薫を如何にせん、浮舟の進退將た如
 何んか、すべき、況んや其の句宮と相通せるの一事、彼れ
 が畢生の秘密、其の最も秘密とすべき、肅大將に推知
 せられたるに於て、おや、今や浮舟の心中果して如何ぞ、荒涼
 たる宇治の幽光寂々たる江邊の月色見るとして、物思ふ種
 ならぬは、なく、瀟々たる深夜の雨聲、唧々たる叢裡の虫鳴、聞
 くとして、憂ひを惹くの媒ならざるは、莫し、仰いで天を見れ

ば天我を叱するが如く伏して地を看れば地我を嘲けるに似たり嗚呼此に於てか彼は只一死あるのみ。是れ豈に物の哀れの極にあらずや彼れは世に於て最も悲絶を極めしもの其の厭世觀を抱くと共に又極めて多感な如き彼れが半世は凡べて涙痕を留めたる經歷にあらざるはなし再び吾人をして其の第二例として哀觀の調最も深かき

(三) 明石の上

に胸襟を洗ひ閑鷗を侶として浮き世を送れり明石の上では此の入道が一人娘なりける折しも源氏須磨にて配所の月を眺め給ふと聞きて良清入道はいかで吾が娘を参らせんと思ひけるに妻のなにかし流人を御にせんは日惜しといふ入道遂に聞かざ頼かて源氏を須磨より迎へたり旅ひ寐の淋びしければ源氏彼の娘に云ひ寄りて遂にわりなくなれ給へり情交をいと濃きかたにして想思羨むに堪へたるは其の翌年七月に至り宣旨下りて源氏を京へ召し歸せり入道の悲痛は更に増す云はば明石の上の心中果も如何ぞ彼れ源氏には美はしき源氏の君が情けの露をも宿せ

るなり、而かも今別かれて、又何れの日か再會すべき、胎内の赤子は、遂に其の父を見る能はざるか、思ふて此に至れば、彼れが胸中萬感交もく、鍾つまり哀觀云ふに忍びざるものあるべし、曲浦に寄する白浪も、寄せては歸すものなるに、想へる君は去つて遂に歸へらざるなり、噫、其の源氏と別かれて再び住吉の浦に會せるとき、如きは、哀絶最も甚だしくして、誰れか斷腸の同情を表せざるものあらんや、別後一日、瞬時たりとも、腦裡を去らざる戀人に、圖らず途中逢ひながら、數ならぬ身のほどを耻ぢて、轟く胸を押ししづめつゝ、舟を浪華に歸へしたる、其の心裡燃ゆるが

義理人情の更らに愛より大なるもの

如き思ひあるを推知すれば、彼れが爲めに、一滴の涙なき能はざるなり、而して其の後源氏の君より、京へ參あれとのわりなき勸めに従ふて、上洛するや、大井のほとりに閑居して、只生みつる姫君を弄ひつゝ、此の上なき快樂となせるがどとき、何等の哀れ深きぞ、而かも彼の姫君を二條院へ渡さんと云ひける彼れが苦心をも幾許なるや、人誰れか其の愛々しき嬰兒を以て、他人の手に渡すを好むものあらんや、而かも義理人情の更らに愛より大なるものあり、彼れは遂に義理人情の爲めに、其の愛情を絶ちけるなり、嗚呼悲觀彼れが如きは寧ろ

憐れむべきにあらずや、三たび吾人をして、其の第三例とし
て、男性を代表すべき

(三) 薫大將

薫大將
を取らしめよ、抑も薫大將は源氏の子と稱すれども、其の實
は女三の宮が私通の子にあらずや、是を以て彼れ長ずるに
及びて、聊か其の實を聞知せざるにあらず、赧然として心に
愧づる所あり、己れの素性既に愧づべきを知らば、何ぞ世に
對して望みあらんや、彼れは生まれながらにして、既に絶望
の人となれり、絶望の結果遂に彼れは、世を遁がれて家を出
でんと決心せり、これ彼は人生の尤も果敢なき位置に陥い

彼れは絶望の人に
生まる

れるもの、宜なるかな、其の物に對して、無常を觀じ、物の哀れ
を感觸するや、世に望みなき彼れは、既に人世の悲觀を感じ
出家悟道の人とならんとするや、突如として其の悟道心を
攪亂すべき障礙物現じ來りぬ、何ぞや、八の宮の大君が美な
る面影とれ也、色則是空を觀じ、諸行無常を悟りたる彼れも、
大君を見るに至つて、始めて出家となるの無分別を悟りぬ、
これ彼れが物の哀れを觀じ、人世の悲哀を経歴せるの楷梯
とはなりけるなり、彼れ既に大君を慕ふて戀々に堪へず、幾
回か其の意を通ずるも、無情なる大君は遂に之を退けたり、
嗚呼、不知意、薫如きは、世夫れ幾人かある

式部が靈筆に眩せられたる
隠見

吾人が源語に依つて得たる人物の大葉は此の如し其の通有一貫せる性あるは毫も疑ふべからざるの事實なり人或はいふ源語の人物は千態万狀なりとこれ彼の式部が靈筆に眩せられたるの隠見なり吾人は千變一律の趣向を以て讀者をして其の千變一律なるを知らざらしむるものこれ所謂式部が靈筆の致す所なりといふの筆法を以て千變一律の人物を操縦し讀者をして其の千變一律なるを知らざらしむるものこれ所謂式部が靈筆の致す所なりといふべし彼れが人物は一色なるも彼れが筆には變化ある也彼れが人物は一律なるも彼れが綜合には千變万化ある也彼れ

が人物に變化ありといふは即ち彼れが筆力の變化綜合の變化をいふ也今試みに源語上の人物の綜合筆力上の變化を擧げんに
光る君、蓬生の露を分けてあさましかりし花の香ひも捨て給はざる
夕霧、野分けのあしたゆくりなく見初めし心ぐるしさを念じたる
紫の上、思ひやり深く年頃召したる女御を明石のかたに譲づり隔なく云ひ交はしたる
空蟬、年長け怪しげなる良人を守り光る君にさへつれな

かりげる、
 小宰相、句ひの宮の色香にほだされざりし撰、
 句宮、人さまはあでに艶まめかじかれどいと色めかし、
 女三の宮、思はぬ人に従がひ云ひかはしたる、
 軒端の萩、何の用意もなく打ち解けてほこりかなる、
 薄雲の女院、望むことなき御身にてさめぬ夢路に迷ひた
 る、
 夕顔、怪やしき宿に遣ひかくれて物の怪の爲めに敢果な
 くなりたる、
 浮舟、二た道に心をかけて世を浮舟の行衛なく呻

ひたる、
 末摘花、姿よからず顔はせのみにくかりける、
 桐壺、極めて世に時めけるもよろづの妬みに腦ましきま
 で物思ひたる、
 御息所、ねたみ心深くして胸の煙の絶えざる、
 卷中の人物盡く擧ぐるも多少の變化を見るを得べし而か
 も此の變化たる式部が筆力上の變化にして其の人物の大
 躰に至つては常に一定の範圍に循環するなり、

桐壺暮煙速翔法性之虛箒木夜辭終開覺樹之花厭空彈虛世觀夕顔

露命得若紫雲迎令未摘花臺坐紅葉賀秋暮、見落葉厭有爲花宴春
 朝者觀飛花悟無情悲無逢日之融別驚生死無常怨柳葉差而行途知
 愛別離苦、花散里春天除火宅之煩腦身小盡秋水期露地之清涼分
 蓬生深羨尋菩提之眞道越關屋堅扁到涅槃彼岸、 (願文一節)

第七章

散文家としての式部

宮城の、露ふき
 結ぶ風の音に小萩が
 もさを思ひこそやれ
 平安文學の最も他に秀いで、清光を放つは、歌よりも寧ろ

彼れが散
文

散文に在る也、散文家としての式部は、歌人としての式部より、より多くの光榮あるにあらずや、

彼れが散文は、彼れが獨特として、犯かすべからざるものあり、其の流麗婉美なる、其の濃艶富妙なる、古套を排して、新躰を發機せるが如きは、吾人が感嘆屢措く能はざる所なり、彼れが思想の如何と彼れが物語に於ける、結構組織の如何は、吾人既に論及せり、請ふ吾人をして更らに、彼れが金玉の文につま言ふ所あらしめよ、

散文家としては、彼は萬能なり、彼が筆は社會の何れの處にも出入す、其の寂寞を叙し、凄婉を寫つし、無量の愁意を含有

彼が筆は
社會の何

するが如き、火をして其の光景を踏むが如く、想はしむるものあり、試みに源語に於ける、明石の巻を開き見よ、三味堂近くで、鐘の聲松の風に響きあひても、のがなしう、岩に生ひたる松の根さしも心ば、あるさまなり、前裁どもに蟲の聲をつくしたり、とかしこの有り様など御覽、娘すませたる方は、心ごとくにみかきて、月入れたる槇の戸口、けしきはかり押し開けたり、これ源語、部中最秀の文として、藤原定家卿が稱賛措かざりし一節なり、と傳ふ、三味堂近くで、鐘の聲松の風に響きの如きは、一讀人をして、凄絶膚を粟せしむるにあらざや、此の

數語細かに翫味し來れば、岡部に於ける満目の光景、盡く臆眉の間に點をし來る、秋風起こり、暮煙生じ、隱々たる鐘聲は、陰に籠もりて、人の腸を寸断せしむるが如き、何等寥々たる光景ぞ、其の三味堂と云ひ、鐘の聲といひ、松の風といひ、蟲の聲といふが如き、愁情を同伴すべき、數語を點綴して、簡潔なる文中に挿入せる、これ凡骨の及ばざる所なり、野分例の年よりも、あどろしく、空の色變りて吹き出す、花どものしほるゝを、いとさしも思ひしまぬ人だに、あなわかなと思ひさわがるゝを、まして叢の露の玉の緒、亂るゝと、人、御心惑ひも、しぬべくおぼしたり、おほふばか

りの袖は、秋の空にしもこそ、ほしげなりけれ、暮れ行くまゝに、物も見えず、吹き迷はして、いとむくつけゝれば、御格子など来りぬるに、後ろめたくいみじと、花の上を思し嘆げく、南の御殿にも、前裁のくろはせける折りにしも、かく吹き出で、もとあらの小萩はしたなく待ち得たる風の氣色なり、をれ歸り、露もどまるまじう吹き散らすを、少し端に近ぶて見給ふ、大臣は姫君の御方にお在します程に、中將の君来り給ひて、東の渡殿の小障子のかみより、妻戸の明きたるひまを、何心もなく見入れ給つるに、女房數多見ゆれば、立ちどまりて音もせで見、御屏風も風のいた

う吹きければ、押し疊み寄せたるに、見透しあらはなる、胸の御座に居給へる人物に紛るべくもあらず、氣高かく清らかに、さとうち匂ふ心ちして、春の曙の霞の間より、あもしるさかば櫻の、咲き亂れたるを見る心地す、味氣なく見奉つる、我が顔にも、移りくるやうに、愛敬はにほひたり、又なぐめづらしき人の御さまなり、御簾の吹き上げらるゝを、人々押さへて、いかにしたるにかあらん、打ち笑ひ給へる、いといみじう見ゆ、(野分)

朗々として、讀み行けば、銀盤玉を轉るはずが、如し、思ふに、彼れが艶麗の文中、これ等は、其の最も艶麗なるもの、一なる

べし、おほふばかりの袖は、秋の空にじもこそほしげなりけ
 れの如きは、翻案の好模範として後學によき例を與へたる
 もの也、中將の初めて紫の上が花の如き姿を見參みらすの
 一段の如きは、風情眞に迫まりて、艶容掬すべきものあり、其
 の紫の上の秀容美貌を叙して、氣高かく清らかに、さど打ち句
 ふ心ちじて、春の曙の霞の間より、面白き樺櫻の咲き亂れた
 るを見る心地、といふが如きは、何等の清致ぞ、何等の艶喻
 ぞ、王朝文學の中、此の如き優文は、吾人之を他に見る能はざ
 る也、更らに又流暢玲瓏なる文あり、
 年立ちかへる朝の空の景色、名残りなく曇らぬうららかな

げさには、數ならぬ垣根の中だに、雪間の草若やかに、色づ
 きそめ、いつしか氣色だつ霞に、木の芽も打ちけふり、ちの
 づから、人の心ものびらかにぞ見ゆるかし、ましていと
 玉を敷ける御前は、庭より初め見所おほく、みがきまし給
 へる御かたのありさま、まねびたてんも、言の葉たる
 まじくなん、春のあどりの御前取りわきて、梅の香も、御籬
 の内のにほひに吹きまがひて、生ける佛の御國とおぼゆ、
 さすがに打ちとけて、やすらかに住みなし給へり、(初音)
 如何に行文の麗々しきかを見よ、正さに是れ、律回、年暮、氷霜
 少、春至、人間草木、知の實景を寫つしたるもの、一陽來復の光

景紙上に、隨如たるにあらず乎、又之れど、相對すべき匹儔の
文あり、

秋のけはひの立まゝに、土御門殿の有様、いはん方なくお
かし、池のわたりの梢ども、遣水の邊の草村、をのがじい色
づき渡りつゝ、大方の空も艶なるに持て、囃されて、不斷の
御讀經の聲々、哀れまさりけり、やうく涼しき風のけし
きにも、例の絶えせぬ水の音なん、夜もすがら、聞きまがわ
さる、御前にも近うさふらふ人々、はかなき物語りするを、
きこしめしつゝ、なやましうおはしますべかめるを、さり
げなくもてかくさせ給へり、御有さまなどのいとさらな

ることなれど、浮世のなぐさめには、かゝる御前をこそ、尋
ね参るるべかりけれど、うつし心をば引き違へ、たとしへ
なくよろづ忘るゝにも、かつはあやしき、まだ夜深かき程
の、月さし曇り、木の下小ぐらきに、御格子まいりなはや、女
官はいまださふらはじ、藏人まるれなどいひしらふほど
に、後夜の鐘打ち驚ろかし、五だんの御修法、時はじめつ、我
れもくくと打ち上げたる、伴僧の聲々、遠く近かく聞き渡
たされたるほど、おどろくしくたうとし、(日記)
其の春景を叙するや、艶陽、其秋景を寫つすや、寂寞、異曲同巧
の文、讀み行けば、吾人をして、唯其の景中に、彷徨するの想ひ

あらしむ、其の男女の間の愛情を叙して、淫に流れず、他の筆を以て書かしめば、淫猥極りなきの醜事となるべき事も、彼れは最も高潔に、最も婉曲に、而かも最も濃情に、何等の障凝もなく、何等の躊躇もなく、流水の如く書き下せり。

光り見えつる方の障子を押し明け給ひて、空の哀れなるを諸共(薫と大君)に見給ふ、忍の露もやうく光り見えもて行く、互みにいと恋なるさまかたちどもを、何とはなく、唯かやうに、月をも花をも、同じ心にもてあそび、はかなき世の有り様を聞こえ合せてなん、すぐさまほしきと、いと懐つかしきさまして、語らひ聞こえ給へば、やうく

恐しさも慰みて、かういとはしたなからで、物隔てゝなど、聞こえれば、誠に心のへだては、更らにあるまじく、なんと答へ給ふ、明くなりゆき、村鳥の立ちさまよふ羽風近う聞こゆ、夜深き朝の鐘の音かすかにひく、今だにいと見苦しきをと、いとわりなう恥づかしげに思したり、ことありがほに、朝露も、老分け侍るまじ、又人はいかゞ推し量り、聞こゆべき、例のやうに、なだらかに、もてなさせ、給ひて、唯世に違へたることにて、今より後も、たゞかやうに、しなさせ給ひてよ、世にうしろめたき心は、あらじと、おぼせ、かばかり、穴がちなる心の程も、哀れとおぼし知らぬこそ、甲斐なけ

れとて、出で給はんの景色もなし(總角)
 喃々たる怨言、鼻々たる艶語、春風薫ずるが如く、曉花開くが
 如し、読み去り読み來れば、腦裡一種の艶情を留むるのみに
 して、原文又醜猥として指すの點なし、彼れは不言不語の裡
 に於て、其の語らんと欲する所を語れり、而かも其の醜體を
 文致の上に留めざりき、是れ彼れが文章の勝ぐれて優なる
 所以也

所は春の夜もいと明かし難きを、心やり給へる旅寝のや
 どりは、悉ひの紛ぎれにいと疾う明けぬる心地して、飽か
 ず歸らんことを宮はおぼすはるく、とかすみ渡れる空

に、散る櫻あれば、今ひらけ初むるなど、いろく見渡さる
 く、に、河そひ柳のおきふし靡く水かけなど、あろかならず、
 をかしきを見ならひ給はぬ人は、いと珍づらしく、見捨て
 がたしとおぼさる(椎木)
 山吹などの心地よげに、咲き亂れたるも、うちつけに、露け
 くのみ見なされ給ふ、外の花は一重散りて、八重咲く花櫻
 さかり過ぎて、樺ざくら開らけ、藤は後くれて色づきなど
 こそは、すめるを、其の遅く疾き花の心を能くわきて、いろ
 くをつくし植ゑあき給ひしかば、時を忘れず、匂ひ満ち
 たるに、若宮まろが櫻は咲きにけり(幻)

これ等は巧みに文を弄して、艶美を極めたるものなり、
彼れは又叙景の文に於て、其の最も艶麗なる彼れが伎倆を
見はしたり。

野山の氣色はふかく見しらぬ人だに、たゞにやはおぼゆる
嵐に堪へぬ木々の梢も、峯の葛葉も、心あわだつしう、争
ひ散るまぎれに、たうとき讀經の聲かすかに、念佛などの
聲ばかりして、人のけはひいと少くなう、木枯らしの吹き
拂ひたるに、鹿は唯まがきの下にたゞみつゝ、山田のひ
たにも驚かず、色こき稻どもの中に、まじりて、うち鳴くも
うれへ顔なり、瀧の音はいとゞ物思ふ人を驚かし、顔に耳

かしましう轟ろき響く、叢の蟲のみぞ、より所なげに鳴き
よわりて、枯れたる草の下より、龍膽のわれひとりのみ、心
ながらはひ出で、露けく見ゆるなど、皆例のこの比のこ
となれど、折から所からにや、いと堪へがたき程の物かな
しさをなり。

朗讀一過すれば、耳底に騒然たる響きあるものゝ如し、嵐に
堪へぬ木々の梢、峯の葛の葉、心あわたいしう、争ひ散るの一
句は、山家に於ける秋景の千態萬狀を、悉く抱括し盡くした
るにあらざや、其のうれへ顔と云ひ、人を驚かし、顔といふが
如きは、形容實に眞に迫まれり、木々の梢、峯の葛の葉、瀧の音

叢の虫扱ては龍膽の花を以て人の活動の如く書きなせる
 は文中一種の愛嬌あり西文に於けるパロソニフヒケーシ
 ヨンの一種として見ることを得ん其の夏の日を叙して
 いとあつき日東の釣殿に出で給ひて涼み給ふ中將の君
 も侍ひ給ふ親しき殿上人數多侍ひて西川より奉れる鮎
 近き川のいしぶしやうのもの御前にて調むてまゐらす
 例の大殿の君達中將の御あたり尋ねて参り給へりさう
 しくぬふたがりつるをり能く物し給へつるかなど
 て大酒まゐり氷水めして水飯などとりくにさうどき
 つくふ風はいとよく吹けども日のどかに曇りなき空

の西日になるほど蟬の聲などもいと苦るしげに聞こゆ
 れば水の上むとくなる今日のあつかはしさかなむらい
 の罪は許されんやとて寄り臥し給へり
 といふが如きは盛夏の紅熱蒸すが如き實景を摸寫して餘
 蘊あるを見ず其の常陸の宮の荒涼破壊せる廢頽の景を叙
 して
 日比降りつる名残りの雨少しそゞぎてをかしき程に月
 さし出でたり昔しの御歩行思し出でられて艶なる程の
 夕月夜に道のほど萬の事思し出でゝちはするに形もな
 く荒れたる家の木立茂く森のやうになるを過ぎ給ふ大

なる松に藤の咲きかゝりて、月かげに靡きたる風につき
 てさど匂ふがなつかしく、そこはかどなき薫りなり、橋に
 はかはりてをかしければ、さし出で給へるに、柳もいたう
 しだりて、築地もさはらねば、亂れふしたり、見し心地する
 木立かなと思すは、早うこの宮なりけり、
 と記するが如きは、筆痕淋漓として、幽光冷靜の躍如たるを
 見る、日比降りつる名残りの雨、少しそゞぎてをかしき程に、
 月さし出でたり、とは、何等の妙句ぞや、吾人之を讀んで、沈思
 冥想すれば、淡月朦朧として、幽かに雲端を照すの絶景、歴々
 として、双眸に聚まるを見るにあらずや、大なる松に藤の咲

筆路嚴正
 にして犯
 すべから

きかゝりて、月かげに靡きたる、さど匂ふがなつかしく、そこ
 はかどなき薫りに至つては、奇景神に入りて、妙絶殆んど云
 ふ所を知らず、松蘿孤月清香を送り來るの絶景は、彼れが
 靈筆を待ちて、清香愈よ薫む渡る也、其大なる松といふ中に
 は、古宅の荒涼たる意を含くめ、築地もさわらねば、亂れふし
 たり、に至つて、三逕荒蕪の、凄凉を畫き、荒れたる家の木立ち
 茂くに應ずるなど、筆路嚴正にして、犯すべからざるものあ
 り、其の
 あじろのけわひ、近かく耳かしましき川のわたりにて、靜
 かなる思ひに、かなはぬ方もあれど、いかゞはせん、花紅葉

水の流れにも、心をやるたよりに寄せて、いとゞしく眺め
 給ふより外のことなし、(橋姫)
 の如きは、宇治の清光を、目前に睹るが如し、更に進んで中將
 の君が、夜行の眞景を寫つすに至りては、凄婉の筆、何人か之
 に敵するものあらんや、

有明の月のまだ夜深かくさし出づるほどに出で立ちて、
 いと忍びて、御供に人などもなく、やつれておはしけり、河
 のこなたなれば、船などもわづらはで、御馬にてなりけり、
 入りもて行くまゝに、霧ふたがりて、道も見えぬ、繁木の中
 をわけ給ふに、いとあらしましき風のきほひに、ほろ／＼と

落ち亂だるゝ、木の葉の露の散りかゝるも、いとひやゝか
 くに人やりならず、いたく濡れ給ひぬ、(橋姫)
 宛然これ深夜に於ける山家の好畫圖にあらずや、
 吾人をして更らに、彼が如何に艶麗に、人物を寫つし出だせ
 しかを見せしめよ、

上よりあるゝ道に、辨筆相のきみの、戸口をさしのぞきた
 れば、午睡したまへる程なりけり、萩紫苑いろ／＼のきぬ
 に、こきかうちめ、心となるを、上にきて、顔はひき入れて、硯
 の箱に枕してふし給へる、顔つきいとらうたげに、なまめ
 かし、繪にかきたるものゝ、姫君の心ちすれば、くちおほひ

を引やりて、物語りの女のこゝ地もし給へるかな、といふ
 に、見あげて物ぐるをしの御さまや、ぬたる人を心なく驚
 かすものかどて、すこし起きあがり給へる顔の、うち赤み
 給へるなど、細やかにおかしうこそ、侍べりしか、
 婀娜窈窕たる、辨宰相の艶姿嬌躰を、描出して、讀過一番、其の
 人に接するの想ひあらしむ、物ぐるをしの御さまや、寝たる
 人を心なく驚かすものかどて、少し起き上がり給へる、顔の
 打ち赤かみ給へるといふが如きは、しどけなき彼れが嬌躰
 の實景にあらずや、又、薰中將の姿を寫つして、
 顔かたちそこはかど、いつこなんすくれたる、あれきよら

と見ゆる所もなきが、たゞいとなまめかしう耻かしげに、
 心のおく多ほかりげなるけはひ、人に似ぬなりけり、香の
 かうばしさを、この世の香ひならず、あやしきまで打ちふ
 るまひ給へる、あたり遠く隔たる程の追ひ風も、誠に百歩
 の外も、薰りぬべき心地しける、(中略)さま／＼に我人にま
 さらんと、つくろひ用意すべかめるを、かくかたはなるま
 で、打ち忍び立ち寄らんも、物のくまもしるきほのめきの、
 隠くれあるまじきに、うるさがりて、をさ／＼取りもつけ
 給はぬど、あまたの御唐櫃に、埋もれたるかうの香ども、こ
 の君のは、いふよしもなき匂ひをくはへ、御前の花の木も

はかなく、袖かけ給ふ、梅の香は、春雨の車にも濡れ、身にしむる人おほく、秋の野にぬしなき藤袴も、もとの薫りは隠くれて、なつかしき追風、ことじ、をりなしからなん、まさりける、

崇高の文

といふが如きは、艶筆の上乗といふべし、更らに彼れが崇高の文を覓むれば、

唯例の雨のをやみなく降りて、風も時々吹き出でつゝ、日此になり侍るを、例ならぬことに驚き侍るなり、いとかく地の底通るばかりのひふり、雷のしづまらぬことは侍らざりきなど、いみじきさまに、驚き恐ぢて居る顔の、いと辛

きにも、心細そさまさりける、かくしつゝ、世は盡きぬべきにやと思さるゝに、その又の日の曉より、風いみじう吹き、潮高う満ちて、浪の音荒らきこと、巖も山も残るまじき氣色なり、神の鳴り閃めくさま、更にいはん方なくて、落ちかゝりぬと覺ゆるに、有るかぎりさかしき人なし、

消息文

再び彼れが消息文に於ける文例を求むれば、

朱雀院より、姫宮の事を紫の上のたまひ遣はされたる文、

稚なき人の心地なきさまにて、うつろひものすらんを、罪なくおぼし許るして、後見たまへ、たづぬ玉ふべき故もや

あらん

そむきにし此の世にのこる心こそ、

いる山道のほだしなりけれ、

やみをえはるけく、きこゆるも、をこがましや

源氏須磨にうつろはんとし給ふ時王命婦の

もとに遣はされたる文、

今日なん都離れ侍る、また参らずなりぬるなん、數多の憂
にまさりて、思ひ玉へられ侍る、よろづおしはかりとりけ
いし給へ

いつかまた春の都の花を見ん

時うしなへる山かつにして、
其の簡潔にして、意味の通達せる、流石は彼れの筆力かゝる
小事にすら、其の靈を籠めたり、其議論文として、批評文とし
ては、雨夜の品定の如きあり、其の全編一字として、金玉なら
ざるなし、

第八章

王朝文學と式部

附清少納言

奈良の歌、平安の文、共に相映じて、王朝文學に燦爛たる光
輝あるを見る、吾人は歴史の流れを溯り、多くの暗黒時代を

遙かに一
點の東紅
を望む

通過し多くの戦國時代を通過し多くの文學時代を通過し、
多くの乾燥無味の時代を通過し、其の將さに盡きんとする
時に當り遙かに前途一點の東紅を望む是れ豈に王朝に於
ける文華にあらずや、
然り王朝文華の絢爛目を奪ふが如きは國史中他に類を見
る能はざる所にして日本文學最盛の時代なり古文學に一
變遷を生ぜし時代なり萬葉調の古今調に遷らんとする
の時代なり古事記的文體の物語的文體に變ぜるの時代な
り要するに王朝時代の文學は上古に於ける朴訥雄俊なる
文學を陶冶融化し精練鍛造し咀嚼同化し混和圓熟して以

平和は多
く文學を
産出す

て之を中古以下の文海に其の水流を送くれる者也、
抑も此の時代の文學此の如く勃興し此の如く旺盛を極め
たる其の故なきにあらず平和は多く文學を産出す是れ古
今東西同一揆のことにあらずや今や王朝は政事上の混亂
なく軍事上の動擾なく天下は風なき海面の如く朝廷は動
かざる舟に坐するが如し是を以て朝の百官優情風を爲し
花晨月夕に詞藻を發して應酬を旨とす上の好む所下又之
より甚だしきものあり此を以て上下共に文弱に陥いり一
時は文學の燦爛たる光輝を發揚するに至りたるなり、
夫れ式部は王朝の後期に生まれて艶麗の筆遂に一世を驚

動せしめたるなり、破れは古文の舊體を一新して自家獨得の旗幟を樹てたり、彼れは在來物語類の古調を離れて、婉麗優美なる一、新機軸を書き出だせり、彼れが出づるや、天下靡然として之に従ひき、見よ、彼れが源語の在りしより以來、此の新筆法に倣へる著書の、此處彼處に散見せるにあらざや、又以て彼れが筆法の、一世を風動せしめたるやを知るべし、思ふに平安朝の文學をして、今に至るまで散文の名譽を擔はしむるもの、主として式部が功に歸せずんばあるべからず、若し試みに天真櫻の如き源氏物語、優美山吹に似たる「狭衣」をして、此の文園より取り去らしめば、平安文學は如何に

寂寞たりしぞ、而して源語は彼れ一代の才筆を弄せし舞臺にして、狭衣は最も多く彼れに私淑せる大貳三位の作にあらずや、是に由つて之を觀るに、彼れが一變せる婉麗優美なる當時の新文體は、長く後世を照らして、我が國文學上に、一大光明を興へたるものなりと云ふも、敢へて溢美にあらざるべし、竊かに當時上下に於ける文學上の嗜好を案ずるに、大平の治に馴れたる彼れ等は、寧ろ古代に於ける崇高豪放の文に飽きて、纖巧美麗を愛するの傾きあり、且つや彼れ等が平生自から踏む所は、花を歌ひ月に舞ひ遊蕩自から恣にし、淫猥

文章以外
の勢力

云ふに忍びざるものあり、此の時に當りてや、式部が源氏物語出づ、卷中收むる所の人物は、盡く其の當時代の人情を寫つして、紙面に躍如たるあり、讀者は必らず、其の卷中の或る部、若くは一部の、人物に相應せる者にあらざるなし、其の從來の物語の如く、現代以外の事を記せるにあらざれば、當時の人情嗜好に適合して一時傳誦せられたるもの、文章以外の彼れが勢力なり、之に依つて彼れが著作は、所謂寫實主義——少くとも半ば以上の寫實主義——にして、聊か王朝の消息を洩らすもの無きにしもあらず、要するに王朝文學に異彩を添へ、王朝文學に光輝を與へ、其餘波曳いて、今世に至

り、爛熳たる文華、今も猶ほ春風に芬々たるは、彼れが功績、其の最も多きに居るを思へば、吾人は轉た彼れが不朽の大文字に驚かざるを得ざる也。

彼と拮抗
すべき才
女

王朝に於ける此の大詩人が、其の時世を極めて精細に寫出する間に、他方に於いて、彼れと殆んど相拮抗すべき、一才女こそ顯はれたれ、顯はれたるものを誰れとかなす、曰く清少納言これ也、彼れが筆力又一世を動かすべきの勢ひあり、之れ彼れと比較して、其の得失を論評するは、式部の爲め又利益あることにあらずや、而して其の兩々相較するに先だちて、先づ清少納言が一代の經歷を窮めざるべからず、今古記

を引用して、彼れが經歷の概略を紹介せん、

清少納言は、一條院の皇后宮に仕へし女房なり、此の皇后宮は、中の關白道隆公の御むすめ、定子と申せし御方なり、枕の草子の所々に、宮のおまへとかゝれたるは、此の皇后の御事なり、然かるに、榮花物語に、清少納言、三條の院の女御、淑景舎の御許に宮つかへせられしよししるせり、此の女御も、道隆公の御娘にして、皇后定子の御妹なり、枕草子には、淑景舎の御事、所々に出でたれど、此の御許に宮仕へせられたる由は見えず、彼の皇后定子は、長保二年十二月に、かくれさせ給ひ、御姓の淑景舎は、長保四年八月に崩く

れさせたまひて、後、兄弟の御方なれば、清少納言も來り通はれたるなるべし、此の人、女ながら學問ありて、才智秀られしが、或る年のきさらぎ晦日に、風吹きて雪すこしふりければ、宰相の中將

すこしはるある心地こそすれ、

といふことを主殿司していひをこそせて、此の上の句をとくく、と責めけるに、清少納言、

そら寒むみ花にまかひて散る雪に

といひやりければ、いといみしくめでられけり、又ある年の冬雪、ふりたる後に、皇后定子女房達に向かはせ給ひて、

香爐峯の雪はいかにと仰せられしかば、清少納言直ちに坐を立ちて、御前の御簾を捲上げられたり、此の事を聞く人々、彼が才の速やかなりしを稱美せり、(中略)此の人の著はせし枕の草子は、今も世に傳はりて、名高かき書也、(中略)清少納言、老後に零落せられたるに、若殿上人數多車して、彼の家の前を通られしに、家の躰も殊の外破壊したるを見て、少納言も無下にこそなりにけれど、車の内より云ふを聞きて、彼の家のうちより、簾をかきあけて、鬼女のかたち、の如き女法師、顔をさし出だして、駿馬の骨を買はずやと云ひたり云々

清少納言の才氣敏捷、英俊なりしことは、彼れが經歷に徴して、既に明らかかなり、之を紫式部が才氣と相較するに、一は英敏にして、他は俊秀なり、彼は即智に富んで、これは深智に富めりき、吾人は枕草紙を讀んで、清少納言の人物を知ることを得、日記を讀んで、又紫式部の性行を推知せり、思ふに清少納言は、性行未だ完全無缺の人とは云ひ難かるべし、彼れ己れの才學に誇るの癖ありき、彼れは婦徳の第一とすべき、謙讓に就ては、何にをも知らざりき、其の駿馬の骨を買はずやの如きは、何人と雖ども、高慢自負の言語たることを認むべし、紫式部既に其の當時に於て、彼れが性行に不賛成の意

を表せり、彼れが日記に曰く

清少納言こそ、したり顔に、いみじう侍りける人、さばかり
さかしらだち、まな書き散らして、侍る程も、よく見れば、ま
たいと堪へぬこと多かり、かく人に異ならんと思ひ好め
る人は、必ず見をとりし、行末うたでのみ侍れば、悉んに成
ぬる人は、いとすこうすいろなる折も、物の憐れにすゝみ、
あかしきことも見すぐさぬ程に、をのづからさるまじく、
あだなる様にもなるに侍るべし、そのあだになりぬる人
の果て、いかでかはよく侍べらん、

式部は彼れが、したり顔なるを攻撃し、其の人に異ならんと

するを尤がめたり之に由て、觀るも、清少納言の性行、不完全
なる一斑を窺ふに足れり、而して、翻へつて、式部一代の性行
を按ずるに、彼れは異を立て、以て、人目を惹かんと、野心
もなく、さかしら立ちて、以て、人に越えんと、の自負心もなく、
其の世に處する、寡言自から抑遷し、以て、其の一代の淑徳を
全ふせり、其の人物の上より論ずれば、清少納言と彼れとは
實に雲泥の差異ある也、
更らに彼れ等が文章の價值如何、思ふに、清少納言の文は、多
くの點に於て、豪宕奔逸、紫式部の文は、多くの點に於て、艶麗
優美なり、これ彼れが性質の上より、陶化し來れる自然の感

化にして、王朝文學に相反せる双光を放ちたる者也。

第九章

源氏物語梗概

(一) 桐壺卷

桐壺の更衣とは源氏の母君なり、父大納言、疾く失せて、世に便なき見とはなれり、父が遺言に、宮仕へに奉れとの事なりければ、其の母遂に宮仕へに出だしけり、扱ても此の更衣は容姿すぐれ、心さま優に在しければ、帝又なく寵愛し給へり、數多の女御更衣とも嫉たましく思ひて、そねみけり、中にも弘徽殿といふは、右大臣の御娘にて、殊に一の宮(朱雀)さへ出

來させ給へば、桐壺心ぐるしく、明け暮れ物思ひに沈み勝なり、既にして帝の御なさけ身に宿りて、遂に玉の如き皇子、生れ給へり、是れ即ち源氏の君なり、此の君三つにならせ給ふ、夏、桐壺は例の物思ひ重もらせ、遂に空しくなり給ふ、帝の御なげき一方ならず、御衣の車も乾かさりけり、然れど形見の源氏、光り愈よ美はしく、生ひ立ち給ふ、年月束の間に過ぎて、源氏の君七歳となり給へり、時に相人唐土より來たり、源氏の君を相して曰く、此の人をして、天下の公事を後見せしめば、天下太平ならんと、遂に光る君と號しけり、年月経れど、帝は桐壺の事思ひつゞけて、忘るゝ能はず、面ど

したりとも似たるものもやと尋ね給ふ處に、内侍の典侍、先帝の四の宮似させ給ふと奏す、即ち兵部卿の宮に仰せて、入れしめ給ふ之を藤壺の女御といふ、誠に内侍の云へりし如く、怪やしきまで、桐壺に似給へり、之にて帝の御心も聊か慰まれぬ、源氏の君は幼きより、此の藤壺を御心にかへ給へり、源氏十二歳にして御元服あり、烏帽子親には、左大臣を召す、左大臣の北の方は、帝の御妹なり、此御腹に藏人の少將といふ男子一人と、他に姫君一人あり、此の姫君を、源氏の北の方にせんと兼ねて定めあり、即ち元服の夜、源氏、此姫君の許へ渡り給へり、此の姫君を葵の上といふ、源氏とは従弟同士な

り、姫の御年は十六歳にして、源氏よりは四つの年上なり、此の巻收むる所、源氏の誕生より十四五歳までの事なり、

(二) 掃木卷

降りみ降らずみ、五月雨の晴れ間なき夜、源中將(光る君)詰め給ふに、頭の中將(桐壺)の巻にて、藏人の少將といひし人、右馬の頭、藤式部等参りて、女の品形を評定し、物にたぐへて、様々争ふ、之を雨夜の品定めといふ、話しは歩を進めて、馬の頭、先づ己のが逢ひし女の事を語る、此の女顔容あまり美しくも、あらざりしかど、裁縫に巧みにして、物まめやかなる女なりければ、順がては本妻にせんと思ひしが、嫉妬深くして、殆

んど持てあませり、かゝれば長く添ひ遂げんこと、六つかし
 かるべし、改心せばと、意見せしに、例の怒り又々起りて、遂
 には馬の頭が手を引き寄せ、指に喰ひ付きければ、之を別れ
 に、久しく音信れざりしに、後にて聞けば、思ひ詫て敢果なく
 なりぬ、其の後に通ひし女は、形よく、歌よみ、琴弾き、優さしか
 れど、心をゆるさん心ばえとは見え、或る夜、此の家に罷か
 りしに、殿上人笛を吹き、此の女和琴を合はせて、歌など讀み
 かはせ居けり、此にて鈍ましく思ひ、其の後は絶え侍りきと
 語る、次には頭の中將語り給ふ、親もなく、心ばそげなる女、
 只管中將を頼める心ばえいと哀れなりし、久しく訪はざり

しに、恨むることもなかりけり、彼との間には一人の娘さへ
 擧げたり、然れど其の後久しく音づれざりしかば、今は跡な
 く失せて在りかさへ知れず、此の女とは後の卷の夕顔の事、
 娘とは玉桂のことなり、次ぎには式部之丞これも可笑しき
 話などありて、其の夜を明かしけり、
 節分の夜源氏、紀伊守の家へ渡る、伊豫介が女房に空蟬とい
 ふあり、紀伊守が繼母にして、伊豫が後妻なり、此の夜源氏寢
 られ給はぬまゝ、忍び入りて空蟬をつれて在はし、さまざま
 語らひたれど、情れなくて、明方近うなりて歸へせり、夫れよ
 り源氏空蟬の事のみ思ひつゝ、けつ、空蟬が弟の童を呼び寄

せ朝夕御傍に召し使ひ能く云ひ含くめて文など使はし給ふ、これより源氏紀伊の守の遣り水面白しとて、之に託して渡り給へど、空蟬は遂に臥所をかへて逢ひまつらす、

(三) 空蟬卷

源氏が召使ひ給ふ、空蟬の弟を小君と呼ぶ、源氏の君、空蟬の事を思ひ給ひ、彼の小君に、何とぞたばかりて、引き合せよと、語らひ給へば、小君は心得諾しけり、隙もあらばと思ふ内、紀伊の守國に下り、女ばかりとなりけり、長き折ぞと、或る夕暮れ、小君が車に、源氏と二人打ち乗りて、空蟬が方へ行き、源氏を其儘、車に置き、小君獨り内へ入りて見れば、空蟬は軒端の

萩、これは空蟬が繼娘なりと打ち向かひて、碁を圍み居けり、源氏車より下り、格子の下に寄りて、覗き給へば、空蟬は瘦せて、軒端の萩は肥えたり、二人碁打果て、一所に寝ねたり、小君竊かに、源氏を誘ひ奉る、娘はいぎたなう寝入りぬ、空蟬はまだ寝もやらず、居たり、物の氣はひを聞きつけ、そと起き出で、隠れぬ、此くとも知らぬ、源氏は、軒端の萩を、空蟬と思ひ違へて、寄り給へば、あらぬ人なりけり、然れど、今更ら人違へなりとも云はれず、唯御心ざしのやうに、語らひ給ひて、蟬のもぬけたらんが如く、空蟬が脱ぎ置きたりし、薄衣を取りて、歸へり給ふ、

(四) 夕顔卷

源氏六條わたりへ忍び歩りきし給ふ(これは桐壺の帝の御弟春宮にて崩心給へりしに御息所御姫宮一人持ち給ひて六條に住まひ給へり即ち之に通ひ給ふ)途次乳母の家に立ち寄る此の乳母は大貳の乳母と稱して源氏が隔てなく召し使ふ惟光の母なり此の乳母が隣りに檜垣など新らしく結ひめぐらして夕顔といへる花の美しく咲きける家あり源氏車立てい見給ふに簾の中に美しくしき女ありけり木の卷に頭の中將が跡もなく失せりと語りたる女はこれなり惟光に取りなさせて源氏遂に之に通ひ初め給ふ互ひ

に誠のことを打ち包みて語らず心のみ深くなり行けり八月十五夜に源氏此の家に泊まり給ふ板屋洩る月影など面白う御覽じて其の夜は明けぬ曉に源氏夕顔(此の女をいふ)と召つかふ右近とを引き連れ程近き河原の院に行き給ふ十六日一日は閉づかに此處にて語らひ暮らしけり源氏其の夜の夢に怪やしき女顯はれ此の女を連れ歩りき給ふは妬ましとて側へに臥したる夕顔を搔き起さんとすると見えて覺めたり夢に見えたるは即ち六條御息所の怨靈なり右近を起として火を命ずれど恐れて出でず兎角して灯ともさせ見給へば夢に見し女の面影ふと見えて失せたり夕顔

を引き動ごかし給へど、手足既に冷え、息も絶え果てたり、己
 のが愛でつる夕顔の敢果なくなりければ、源氏心も捗々し
 からず、咳氣を偽り二條院に引き籠もり給ふて、出で給はず、
 夕顔が召使ひける、右近を召し寄せ使ひ給ふ、源氏右近より
 細かに夕顔の身の上を聞き、初めて彼は、雨夜の品定め、折
 り頭中將が語りける、女なりと知りぬ、餘り哀れに思はれ、彼
 に子なきやと尋ね給へば、三つになり給ふ、姫君一人ありと
 申しける、此のなげきの内に、月日立ちて、源氏空蟬にも音づ
 れ給はざりき、九月つごもり、伊豫之介國へ下る、此度は空蟬
 をも具して行きけり、源氏夕顔に別かれて、沮さへ乾かざる
 に、空蟬が下ると聞き、いとわびしく思ひけり、彼のもぬけの
 小袖に、歌添へて歸へし遣る。

(五) 若紫卷

源氏瘡病を煩ひ給ひ、手を盡くせども、遂におちず、北山に尊
 き聖あり、此の人に呪咀せしめ給へど、すゝむるものあり、然
 らばとて北山に参り給ふ、徒然にこゝかしこを見給ふに、
 或る家の柴垣より覗き給へば、四十ばかりなる尼、脇息の上
 に、經を置き讀居たり、女の童の遊べる中に、十歳ばかりなる、
 美しく、愛らしげなる、乙女あり、見れば此の乙女の顔、源氏
 が明け暮れ忘れぬ、藤壺の女御に似たり、床かしきまゝに、

弟子の僧都に彼の乙女が事を聞き給へば、僧申すやう、爰に侍る尼は愚僧が妹にして、按察大納言の後家なり、娘一人持ちしに兵部卿の宮通ひ給ひ、娘なども出来候ひしが、姪なる娘世を早くしぬれば、彼の尼は孫を育だて、明け暮れ祈りの爲めに此處に侍るなりと申す、孫とは即ち此の乙女紫の上をいふなり、其の頃藤壺の女御懐妊して心地例ならざれば、さへと出で給ふ、良き折りぞと例の源氏、王命婦を責めて、藤壺と逢ひ給へり、此の巻までに藤壺と源氏の語らひは深かりけるものと知るべし、扱ても源氏は紫の上を二條院へ引き取らせ、西の對に住ませ、己のが娘のやうに冊づき給

へり、

(六) 末摘花巻

葵の上は御心さま、氣高く形も優に勝ぐれ給へり、六條の御息所も姿かたちは宜しけれど、猛き心ばえに恨みごと多かり、二方には源氏さのみ心も移り給はず、夕顔のみは物知らかに心ばえも面白かりければ、心よく思ぼしたるに飽かぬ程に別かれ給へり、然れば夕顔に倣似たるものもやと尋ねさせ給ふに、命婦いふ、常陸の宮の娘君にいと宜きが待り、琴など彈き給ふを折々聞けりとの事なれば、然らば其れ媒ちせよと命ず、折々は來れど、打ち解けて出で給はねば、御姿ま

で定かに知り侍べらずと云へど源氏強いて頼のみ文つかはしけり此の姫歌も讀むこと出来ぬば乳母の侍従といふが代りて返歌をぞなしける源氏哀れにおぼしてさまざま心を盡くし云ひ寄りて見給ふにあな無殘顔も形ちも宜からず鼻は象鼻とかいふものにて醜きこと二目とは見られず源氏如何なればかゝる不具者に逢ひ初めつらんと悔しさ限りなけれど又思へば吾にあらぬば誰れかよく忍ばんと其の後屢々通ひ給ひけり源氏が逢ひしとき讀み給へる歌により此の女を未摘花といふ

(七) 紅葉賀卷

桐壺の帝五十歳にならせ給ふ十月紅葉の御賀あり源氏は紅葉をかざして青海波といふ舞をなし給ふ翌年三月藤壺若君を産み給ふ實は源氏の御子なれど帝露もしらせ給はず寵愛限りなし源氏の顔に能く似たるを以て人や怪やしまんと藤壺いど心を困るしめけり

此の頃桐壺の帝御位を春宮に譲らんと思ほす春宮とは桐壺の卷に一の宮とありし弘徽殿の腹の御子なり春宮立ち給はし御跡繼には藤壺の若君をと思召しけり帝又藤壺を中宮となし給ひけり中宮は知行多くして弘徽殿先きになり給ふべき位なるに後に参りたる藤壺に先を越されけり

れば、藤壺を悪くむの念愈よ高まりける。

(八) 花の宴卷

南殿の櫻奇芽を吐くの時となりければ、二月廿日あまり、宮中に花見の宴ありき。源氏春宮に責せられて青海波を舞ひ給ふ。頭の中將は都花苑を舞ふ。此の夜源氏隙さへあらば、藤壺に逢ひ見んと、伺ひ給へど、戸も閉ざされたり。詮なく立ち出で給ひ、弘徽殿の細殿といふ所に至るに、若き女の優さしき聲にて、朧月夜に如くものぞなしと、口ずさみつゝ、端しの方へ出づるものあり。例の源氏床かしく思ひて、走せ寄り袖を捕らへて引きすゑければ、女驚きて誰ぞといふ。我れなり

と答ふ。女源氏の君なるを知りて、心春めけり。女を誰ぞと問ふに、答へず。歌讀み扇取りかはして、其夜は別かれぬ。此の女は弘徽殿の妹にて、六の君といふ。春宮の女御に参ゐらせんと定め給ふ。今宵花の宴の舞を見物せん爲め、さどより弘徽殿へ参ゐりしなり。後に春宮に参りて、朧月夜の内侍といふ。源氏例の好色心より、又々六の君のことを思ひて心に掛けけり。三月の末、藤の花盛りなれば、弘徽殿姫君つれて、さどへ参ゐり給ふ。源氏にも來よとの事なれば、至りけり。朧月夜も其の坐にあり。源氏催馬樂を歌ふて、彼の夜の事をほのめかす。簾の内に打ち嘆くけは、ひ聞こえけり。

(九) 葵卷

世の中變はりて、伊勢加茂の齋宮變はらせ給ふ、伊勢の齋宮には、六條の御息所の御腹、加茂の齋宮には、弘徽殿の御腹、女三の宮と定め給ふ、四月に加茂の祭りあり、此の時齋宮に立たせ給ふを以て、源氏勅定にて御供を蒙る、今歳の祭りは、例より見所ありとて、老若男女、道の遠近を問はずに、群集す、葵の上は、只ならぬ御身に、て惱ましければ、心引きた、ぬど、女房達に勤められて、俄かに見物に出で給ふ、既に時刻も遅かりければ、車立つべき所もなし、然れど源氏の北の方なれば、人々のきて通しけり、かく物見車多きが中に、網代の古びた

る二つあり、脇へ押し遣らんとすれど、これは並々の車にあらずとて、動かさず、扱ても此の車は六條の御息所の車なり、葵の上は此くとも知らざれど、供の侍共は、御息所を能く知り、然れど日頃源氏と通じて、主の敵なりと思へば、かゝる時に思ひ知らせんとて、是非を云はせず、彼の車を押やり、轅を打ち折りけり、御息所うき目を見て、口惜しさ限りなかりき、扱ても御息所は車の争ひより、いと物思はしくなり行けり、遂には其の怨靈凝りて、葵の上に崇りけり、其の後葵の上には、物の怪つきて、加持祈禱手を盡くし居けるに、程なく若君

をやすくと産ませ給ひ、身を分けて親は遂に敢果なくなり給ひぬ。源氏いとし悲しく四十九日の忌み明きけるも、唯二條院にのみあわして紫の上と基打篇つきして遊び居けり。此の卷には紫の上も十四五歳となり、美しくしき愈よ勝さりゆく。源氏紫の上と新枕を交はしけるは、此の卷の中なり、而して此の卷中にて源氏の御歳廿一なり。

(十) 榊卷

加茂の車争ひより、御息所は思ひ亂れて、怨靈とさへなり。葵の上敢果なくなり給へば、源氏も之を疎んじ給ひ、御通ひ路も枯れくになり給ふ。御息所いとし詫びしく頼みさへ敢

果なくなりければ、此の上は娘が伊勢齋宮に定まり九月伊勢へ下るべければ、之に従ひ己れも伊勢へ下らんと決心しぬ。源氏も流石哀れに思ひて、九月の夕暮れ、六條に音づれ、一夜語り明かして歸りつ、頓がて御息所は伊勢に下りけり。御息所三十、源氏二十二歳なり。此の歳桐壺の帝崩じ給ふ。春宮立ちて六の君入り内侍となる。女三の宮院の御服にて下り、槿花の姫君之に代はる。六の君は花の宴の夜より、源氏のことにおのみ心引かれて物思はしげなり。兎角する内に、六の君瘡病を患ひ、養生の爲めとて、さどへ歸へる世に聞こえたらんに、いと恐ろしき事なれど、互ひに通ふ心なれば、どか

くして夜な、源氏と逢ひ給ふ、度重なるまゝ、知る人も多
かりけり、或る日夏の事なりければ、驟雨遠に來たり、雷鳴烈
しければ、源氏歸り給ふべきやうなく、几帳の内に隠くれ給
ふ、此くて右大臣六の君の父見舞にとて來給ひ、源氏の姿を
認め、大に立腹して、太后に語り給ふ、太后もいと、源氏を憎
くみ給へり、

(十一) 花散里卷

花散里とは麗景殿女御(桐壺帝の女御)の妹君三の君をいふ、
源氏云ひよりて折々は、通ひ給へり、橘の香をなつかしみ郭
公、花散る里を尋ねてぞ訪ふと源氏のみみ給ひしより、此の

君を花散里とはいふなり、

(十二) 須磨卷

太后左大臣と源氏の中らひ、彼六の君のことより、愈々むす
ぼれて、面白からず源氏心に思ふやう、かくして長く居たら
んには、遂に遠き國へ流がされ憂き目を見ることあるべし、
如かず自から京を去らんには、と思ひ立ちて扱て何處や良
けんと思ふに、須磨は都に近かければ、これ宜しかるべしと
て、遂に須磨に下るに決す、紫の上いと便なく、嘆げ、と源氏
思ひを殘こして別かれ行けり、朧月夜も本意なく、思ひわづ
らひける、扱て須磨の風光は都とは事かはりて、珍づらしき

事數多あり、眞柴たぐ、蟹の烟、舟の梶の音、浪の音など、耳に目に新らしく、暫時は過ぎ行きぬ、明石の浦に良清入道あり、一人の美しくしき娘を、持てり、源氏竊かに文つかはしたれど、返事だになし、入道は此の娘を源氏に奉まつらんと思ふ、入道の妻はいとゞ之を危ぶみけり、

(十三) 明石巻

大風大雨の夜、源氏少しくまどろみ給ふに、御父故院源氏の傍に立たせ給ひ、何故此くも怪やしき所には居る、住吉の神の導き給ふに、早く此の浦を去るべしと云ふと見て、夢さめけり、其の曉明石の入道より人參れり、夢の告げに任かせて、

御迎ひに參られるなりといふ、源氏取り敢へず、迎ひに俱なはれて、明石へ渡り給ふ、入道喜び一方ならず、娘のこと云ひ出でんと、夫れのみ急ぎ居けり、或る夜入道娘を呼びて、琴など彈かせて、源氏に逢はせけり、其の後源氏よりも度々、文など使はしぬ、かくして秋にもなりぬ、旅寐もいと、物うき折りふしなれば、入道に語らひて、娘を伽に參おらせよといふ、此の娘は常に岡部といふ所に住まひけり、源氏の心ばえ有り難きを聞けど、女は數ならぬ身に、いかで心ざしあらんや、參あり初めて、耻がましき事あれば、中々の物思ひなるべし、とてまゐらず、八月十五夜に源氏堪へがたく、岡部へ渡り初

めたり、思ひしよりは、志淺からず、折々は通ひ給ふ、七月廿日
あまりに、都より召し上ぼしの勅使下たる、源氏は今更明石
の方に別かれんことをつらく思ぼす、此の程明石は懐胎せ
り、然るべきやうにして、京へむかへんと語らひ、發する前夜
岡部の方へ源氏渡り玉ひ、飽かぬ別れに袖を絞る、頓がて翌
日京へ登ぼり給ふ、

(十四) 禊標卷

此の卷にて明石姫君を安産せり。帝は又源氏を召し上ぼし
て、元位に復し、御位を春宮に讓る、春宮十一にて元服あり、い
とい源氏に似させ給へり、權中納言の娘、十二に成り給ふを、

女御に參らせ、之を弘徽殿といふ、源氏公卿殿上人、數多召し
具して、住吉へ詣うで給ふ、彼の明石の方は、年に二度づゝ、住
吉に詣うづる例なるが、同じ日詣うでけり、舟さし寄せて岸
を見るに、殿上人等數多あり、誰人ぞと問へば、源氏の君なり
と答ふ、數ならぬ身の程見られんも、耻づかしとて、早や
舟を浪華に漕ぎ戻しけり、源氏之を聞きて、御鼻紙に歌かき、
明石の許へ送くりやりけり、其の後源氏より、明石へ上り來
よと云ひ遣りたれど、行く未頼むべき身にもあらず、都へ上
ぼりて、又歸り來ん時もあらば、外聞悪るしとて、出でず、

(十五) 蓬生卷

源氏須磨に居給ひし頃都にて情けを掛けし女の方々を思ひつゝけ給へる中にも故堂陸の宮御娘は心細き有り様なれば取りわけ哀れに思ひ折々は音信を通じ給へり然れど固より深かき御心さしのあらざりければ何時とはなしに忘れ果てたり此の宮貧しき暮しなれば内々の苦しき堪へ難く女房共も下がるが多し庭には淺茅蓬生生ひ茂げり築地も破ぼれ傾むきけり四月の頃源氏花散る里へ音づれんとて雨少し降り晴れたる夕暮の月影面白きほどに立ち出で給ふ松に藤のかゝりて築地も崩れたる家あり源氏見覚えあるやうに覺えて暫時考ふるに未摘花の御方なり此く

忘れたるは吾れながらつれなしと思ひて惟光に案内させ頼がて未摘を音づれけり蓬生の宮とは未摘花の事なり

(十六) 關屋卷

159. 先年國に下りたる伊豫之介桐壺帝が崩じ給ひし翌年常陸の守となり空蟬を召し具し常陸に下りしが源氏須磨より歸り給ふ翌年女子共引き具し上京す源氏石山へ上ぼり給ふ途にて行き逢ふ女子の車を此處彼處に隠くして頼がて源氏を迎へけり源氏心の中に彼の空蟬の昔を思ひ出だし其の頃召し使へりし小君今は衛門佐といふを召して空蟬へ歌よみて遣はす常陸守(元伊豫之介)も追々老年に及びけ

れば、老病に腦めり、今はとて小供に遺言して、源氏の君に能く仕へよと命ず、空蟬は常陸守にさへあくれなば、又如何なる憂き目や見んと嘆く、然れど常陸の守は遂に敢果なくなりぬ、始めの中こそ變はらざりけれ、繼子繼母の中なれば、物にふれ事に當りて圓かならず、別きて近頃物領紀伊の守、空蟬に戀慕の心あり、此くては愈よ憂き目を見んとて、空蟬遂に尼となれり、

(十七) 繪合卷

六條御息所の娘、此の卷に女御となり給ふ、つぼぬは梅壺なり、帝は此の卷には、十二歳とならせ給ふ、梅壺の女御は廿二

三なるべし、帝耻づかしう思ぼして、御遊びの相手とし給はず、弘徽殿の女御は、年頃も帝と畧ぼ同じければ、中らひいと宜し、帝何事よりも繪を好ませ給ひ、自からも描き給ふ、然るに梅壺の女御、繪を描き給へば、帝も面白きことに思ひ、屢々之に渡らせ給ふ、弘徽殿の父之を聞き給ひ、面白き繪を集めて、弘徽殿へ遣はされけり、帝御覽じ給ひて、大に喜び、梅壺の女御に渡らせ給ひ、之を見せしめんとす、弘徽殿惜しみ論じ給ひて、心よくも御目にかは給はぬを、源氏聞きて、然らば古き繪ども多く奉つらんと、書棚明けさせ、紫の上と諸共、思はしき繪共、環み給ふ、須磨に居ける折、かゝせたりける繪をも

取り出して、共に上つりけり、權中納言も亦弘徽殿へ、繪を遣はす、三月十日ばかり、空の景色閑かなるに、いと徒然に暮らし給へば、此の繪にて梅壺、弘徽殿を左右にして、繪合はせあり、梅壺の方より竹取物語を出せば、弘徽殿より、うつほ物語を出だす、次に梅壺より伊勢物語、弘徽殿より、上三位を合はせつ、入道の宮(藤壺更衣)判者し給ふ、源氏も参り、中納言、帥の宮も参り、此の度は帥の宮判者し給ふ、終りに梅壺より、彼の源氏が須磨にて描かせたる繪出でけり、人々の目に珍づらしく覺えて、遂に梅壺の勝ちとなれり、之れより遂に遊びとなり、和琴箏、琵琶等にて面白く遊び暮らしけり、其

後源氏無常を感じ給ひ、帝少しく人とならせ給へば、世を背むか、ん下心にて、山里の閑かなるを見立て、御堂を造くらせ給ふ、

(十八) 松風卷 (十九) 薄雲卷

源氏宮殿を普請して、紫花散里、其の外手をかけ給ひし人々を召して、之に住まはしめんとす、彼の明石の上にも、人を遣はし、京へ登るべき旨云ひ遣れり、明石即ち京へ上ほりぬ、大井川のほとりに、明石が縁者の舊宅ありければ、修繕して此の家に住まふ、明石が生みたる源氏の姫君も共もに居りぬ、冬にもなりければ、大井の住居も詫びし、さ勝されり、源氏も

屢々渡り給ふことかなはず源氏心中彼の姫君を二條院へ連れ歸り紫の上に養育せしめんと思へど明石の上に心をかねて云ひ出し給はず明石より數ならぬ身に添へ奉りては姫君の御爲め悪しかるべし紫の上に渡し奉らんと云ひ遣跡て姫君を二條院へ渡すことなれり扱て紫の上は日頃明石を妬たしと思ひ居けるが愛らしき姫君を見るにつけ此の心遠かに消えけり

(二十一) 朝顔卷

源氏兼ねて心を寄せ給ひける加茂の齋院御服にて下り給ふ今までは神慮を恐れて過ごし居けるに今はかく下り給

へば云ひ寄りて恨らみ聞こえけり此の齋院は叔母君と共に桃園の宮に住み給へり源氏屢事にかこつけ渡り給ふ人の噂さを彼れ是れ聞くにつけ紫の上はひたすら思ひなやみけり心をとめて源氏のそぶりを見るに疑はしきことも少なからず扱ては世の人のいふも偽りならじと恨らみけり源氏叔母君(齋院)の病ひを問はんとて例の桃園に訪づれ給ひ齋院の方へ在はして様をに口説き給へど遂に其の甲斐なし紫の上はかくとも知らず思ひ亂れて自づから色に顯はるゝを源氏は見て慰め給ふ

(二十一) 乙女卷

朝顔の卷の齋院盛りも既に過ぎぬれば今は尼になりて行
 ひすまさんと思へど源氏の云ひ寄り給ふ折柄ゆゑ姿を替
 へんは却つて悪ろし暫時はどてためらひけり葵の腹に出
 來たる若君此の卷にては十二に成り給ひ異名を夕霧と呼
 べり頭の中將今は内大臣となりて脇腹に十四歳になれる
 姫君あり夕霧とは従弟同士なり幼少より互ひに思ひかは
 して自づから其のけしきも見えたり内大臣(姫君の親)は人
 の噂さに之を聞きて姫に疵つけんとて立腹し給ふ弘徽殿
 女御の遊び相手にとかこつけて姫君を呼び取りけり幼な
 き二人は其の中を絶たれて心は千々に亂るゝなるべし冬

になりぬ源氏は五節の舞姫を内裏へ出ださんとして惟光が
 娘十三四にて容姿の美なるを呼び之に舞を教へ給ふ夕霧
 此の娘を覗き見けるに年頃かたちまで内大臣の姫君に能
 く似たれば懐つかしく心に留まりて文など使はし遂にお
 りなくなり給へり八月源氏六條院へ移り給ふ花散里明石
 紫秋好む中宮みな共に移れり

(二十二) 玉蔓卷

夕顔の産めりし姫君は三つのおき其の母にわかれ乳母に
 従ふて筑紫に下れり廿歳ばかりになり給ふに容姿勝ぐれ
 て美しくしかりければ遠近よりさまぐに云ひ寄るもの多

かり、肥後の國に大夫の監といふ威勢いかめしきものあり、
 姫を懇望して已まざ、果ては脅迫して、其思ひを遂げんとす
 るに、遂に隠くれ遁がれて、京へ登ぼり給ふ、夕顔が召し使ひ
 たる右近といふ女、此の姫君の行衛を知らざれば、さまさま
 に尋ねて、初つ瀬に詣ふでたるに、観音の靈験にや、ゆくりな
 く、こゝにて姫君に出逢ひけり、右近今は源氏に使かはれ居
 ければ、歸へりて此の由をいふ、源氏大に喜び給ひて、人知れ
 ぬ別腹に出來たる娘なれば、今まで秘し置きけるを、呼び迎
 へたるやうにしなさんとの給ふ、引き取りて六條院へ移つ
 す、之を玉蔓の上といふ

(二十三) 初音卷 (二十四) 蝴蝶卷

此の卷は初春の閑かなる遊びを記るし、源氏が彼方此方へ
 渡り給ふ有様を書けり、内大臣の物領頭の中將異名を柏木
 といふあり、玉蔓を己れが眞の妹とも知らで、思ひを寄せて
 文などつかはしけり、源氏も亦上べのみ親とは云ひなせど、
 心の中には、玉蔓を入のものにせんは、口惜しく思ひて、云ひ
 寄り給ふことあり、玉蔓は如何せんと思ひあづらひけり、

(二十五) 螢卷 (二十六) 常夏卷 (二十七) 籬

火卷 (二十八) 野分卷 (二十九) 御幸卷

源氏玉蔓を如何にもして、我がものにも思ひ、彼れを内侍の

かみになし、帝へ宮仕へに奉り、里住みのほどに、其の思ひを
遂げんと思案し、扱て宮仕へに定め給ふ。内侍は親の氏を取
りて、源内侍、藤内侍、平内侍など呼ぶなり。然るに今玉蔓は其
の實、源氏の娘にあらずして、内大臣の夕顔に出来たる娘な
れば、其の實を明かさざれば、源内侍と呼ばざるべからず。此
の如きは、藤氏の氏神、春日の御たよりあるべし。如何にして
も、源の御娘とは偽りがたし、勢ひ内大臣に、其の實を明さ
るべからず。源氏即ち内大臣に逢ひて、玉蔓の事を詳く話す
大臣聞いて大に喜び嬉れしみけり。二月十六日内大臣と玉
蔓親子の對面あり、内大臣の心中には、娘玉蔓の婿には、蜚兵

部卿が鬚黒大將を取らばやと思ひ居けり

(三十) 藤袴卷(三十一) 榎柱卷

鬚黒大將は石山の觀音へ立願し、玉蔓の女房辨のちもど、
いふに、心を合はせ、押て玉蔓へ通ひけり。源氏は心に腹立ち
給へど、今更ら尤めんやうなくて、過ごし給ふ。玉蔓は思ひの
外に、心うき契りぞとわび給へり。父の内大臣は、鬚黒を婿に
せばやとの下心もあることなれば、心得て、怡び給ふ。鬚黒の
北の方は、紫の上の御姉なり、年頃物の怪にわづらひて、うつ
ゝ心も無くなり、にければ、鬚黒玉蔓に心を移つしけるなり。
北の方の物の怪起ころぬときは、心ばえよき人なれば、鬚黒

大將も玉蔓のこどもを取り出だして語り頼がて此方へ呼び
 取らん中よくして暮らし給へなど語るに腹も立てず居
 けり其の夜になりて鬚黒玉蔓に渡らんとして支度をなし火
 どり取りよせ袖に引き入れて焼きしめ居る折から北の方
 例の物怪おこりたるものと見えふと起き出で、薰籠の下
 なる大きな火どりを取り出だし大將の後ろよりさつと
 打ちかけたり大將これほど驚きて呆然たりしが散亂せる
 灰かぐら目鼻に入りて堪ふべからず大騒動となれり此く
 て北の方は夜二夜泣きのしりりて明かす式部卿の宮之を
 聞き流石は親子の間なればかゝることも全く鬚黒大將が

北の方に引き離れて玉蔓に通ふが故なりと思ひ打ち捨て
 置けば物笑らひとなるべしと思惟し北の方を呼び取りけ
 り鬚黒此くと聞き驚ろきて式部卿の方に至れば病氣なり
 とて會はず已むなくして歸れり正月踏歌あり鬚黒踏歌の
 歸りかけに玉葛を我が方へ引き取りけり源氏は此く早く
 渡さんとは思はざりしに出し抜かれにきと口惜しく思ふ

(三十二) 梅枝卷

二月朱雀院の東宮御元服あるべき筈なれば源の姫君女御
 に參らせ給はん事打ちつくべきとて姫君の裳着の事を
 思ほし急ぎ用意の講物ども合せ給ふ香の善悪を極むるを

となどあり、内大臣は御娘雲井の雁を東宮に奉らんと心ざしつるに、夕霧の妨げ給ふにより、入内もならず、恨らめしく思へり。源氏は又いとけなき同志心を交はしたりとて、穴勝ち悪くむべき事にもあらぬを、内大臣ことごとくしく罵りて、娘を引き取り、乙女の卷参照年月夕霧を詫びしめたるを恨らめしく思へり。夕霧は内大臣の所爲を只管恨らみ思へど、其が娘の雲井の雁は忘れがたく、此の君ならぬば、北の方に持つべきもの無しとまで思ひ込みけり。姫君も亦夕霧ならではど互みに思ひ想もはれける。

(三十三) 藤裏葉卷

内大臣は娘雲井の雁が有り付けやう無ければ、遂ひに夕霧を聳に取らんと決心せり。卯月十日の頃庭の紫藤花盛りを告げれば、柏木を使ひとして夕霧を招きけり。夕霧父なる源氏の御前に参りて、しかくの由を語れば、源氏は扱てこそ内大臣も我を折りたるならん、速やかに参るべしといふ。夕霧即ち日の暮る頃、内大臣が許に至る座敷に案内して、内大臣も自から出で、物語りし給ふ暫らくして、花の興に移れり。面白く酒のみ交はして、頓がて酒宴も果てければ、柏木案内して、妹雲井の雁の御方へ夕霧を誘なひ入る。年月互みに思ひを焦がせし間なれば、二人が嬉れしさは如何ば

か。り。な。り。け。ん。げ。に。中。ら。ひ。は。水。も。洩。る。ま。じ。と。ぞ。思。は。れ。け。る。
藤。内。待。乙。女。卷。の。惟。光。が。娘。は。雲。井。の。雁。に。年。の。ほ。ど。大。き。さ。な。
と。似。た。り。と。て。夕。霧。時。々。逢。ひ。給。ひ。て。慰。さ。め。居。た。り。し。に。今。は。
望。み。の。如。く。内。大。臣。の。婿。に。な。り。け。れ。ば。心。苦。る。し。く。内。侍。は。思。
ひ。け。り。

(三十四) 若菜卷上下

朱。雀。院。つ。ね。病。躰。に。渡。ら。せ。給。ふ。な。る。に。こ。た。び。も。腦。や。ま。
じ。く。常。よ。り。は。心。細。く。覺。え。け。れ。ば。西。山。の。寺。に。引。き。籠。り。て。行。
な。ひ。を。せ。ば。や。と。思。ふ。に。つ。き。姫。宮。の。御。方。付。を。思。ほ。し。わ。づ。ら。
へ。り。四。所。の。姫。宮。あ。り。け。る。中。に。も。藤。壺。中。宮。の。妹。源。氏。の。宮。の。

腹。に。出。來。給。ひ。し。女。三。の。宮。を。取。り。わ。け。寵。愛。深。か。り。け。り。御。
年。も。十。三。四。ば。か。り。な。れ。ば。物。の。心。も。わ。き。ま。へ。さ。る。頃。な。り。母。
君。は。世。を。去。り。給。ひ。け。れ。ば。何。方。へ。も。預。け。心。易。く。見。置。き。て。後。
世。を。背。む。か。ん。と。朱。雀。院。は。思。ひ。給。へ。り。い。ろ。く。に。思。ひ。迷。ふ。
て。遂。に。六。條。院。に。預。け。給。ふ。こ。と。な。れ。り。源。氏。は。紫。の。上。に。心。
を。置。き。て。女。三。の。宮。渡。ら。ば。彼。れ。の。何。と。か。思。は。ん。と。危。ぶ。み。扱。
て。隠。く。す。べ。き。に。も。あ。ら。ね。ば。明。ら。さ。ま。に。語。る。紫。の。上。み。づ。か。
ら。は。何。の。心。も。置。き。侍。べ。ら。ん。や。女。三。の。宮。の。妬。ま。し。く。さ。へ。思。
ほ。さ。ね。ば。心。や。す。く。て。待。ら。ん。と。い。ふ。二。月。十。日。あ。ま。り。に。女。三。
の。宮。六。條。院。へ。渡。り。給。ひ。源。氏。が。御。座。所。に。し。た。る。新。殿。と。い。ふ。

明き間に移り居けり、源氏之れへ連りに渡り給ふ、紫の上心
 の中に味じきなく物哀れに眺め勝ちなれど、隠くして露も
 顔色には見せず、少いさき胸に物思ふ身となれるもいと
 哀れなりけり、いとどか、面に白き日夕露、柏木など打ち寄
 りて蹴鞠の遊びあり、此の處より女三の宮の御方は西にあ
 たりて建てられあり、柏木は物のひまに女三の宮を一目見
 て、いと、思ひ深くなれり、其の後彼れはいろく、思ひ佗
 びて小侍従を語らひ、強いて女三の宮に云ひ寄りけり、さて
 源氏女三の宮へおたり給ひし折りしも、柏木よりふみかき
 て、小侍従方まで、おこせ給ひしを、少しのひまに女三の宮に

見せ奉るに、源氏おはしませば、小侍従は立つて次の間に出
 づ、女三の宮は文を柵の下に隠くし給へり、朝とく源氏は歸
 らんとて、思はず彼の柵をはねかへすに、一通の文出でたり、
 之を見るに、柏木の手跡なり、これにて、柏木女三の宮の私通
 發覺し、源氏もいと、當時女三の宮懐妊の子を後ろめたく
 思ふ、

(三十五) 柏木卷

柏木は彼の文の一件より、女三の宮との間、源氏に顯はれた
 れば、消えも入りたき思ひして、例ならぬ心地に打ち臥し、所
 詮此の儘に死なんこそよろしからめと念ず、女三の宮は懐

妊期満ちて、一男兒を生めり、之を薫といふ、宮は懐妊中、さま
く心に心を苦しめし故にや、惱みがちなれば、此の上は尼に
ならんとて、遂に世を遁がれける、

(三十六) 横笛卷 (三十七) 鈴虫卷

柏木は遂に慚死せり、源氏は幼少の時より親しき間なれば、
哀れに思ほし給ふ、夕霧は、柏木の北の方一條の宮に屢々通
ひ給ふ、夕霧の北の方、推諒して、妬たく思ほせり、落葉の母み
やす所より夕霧に、柏木が持ちける横笛を奉る、夏にもなり
て、蓮の花盛りなる頃、女三の宮の持佛堂の供養あり、女三の
宮の讀み給ふ、經を源氏自から書けり、此の頃源氏は屢々此

方へ渡り給ふ、秋の頃、渡殿のまへを野邊に作くらせ、色々の
虫を放てば、鳴き立つる聲を面白し、源氏こゝに十五夜の月
を眺め、松虫鈴虫の聲のよしあし定め給ふ、匂宮夕霧其の外
殿上人参りて、面白く遊びけり、

(三十八) 夕霧卷

夕霧の大將柏木の北の方、落葉に心をかけて、人めには柏木
の遺言を違へじと訪ふて、いにもてなし、下心には思ひをこ
めて、萬づ念頃に聞こえ給ふ、落葉の母御息所物の、けにわ
づらひて、比叡の麓小野といふ所に住まひ山に籠りたる、律
師を請ひ祈らせけり、夕霧も見舞ひとて渡れり、家甚だ狭ま

く客を入るべき所なければ、落葉の在はず御簾の前に夕霧
を入れ奉る夕霧はどかくして御簾の内にいざり入り思ひ
渡る心の中を聞こえ盡くし給へどあさましとて遁がれ隠
くる所に至れる律師の朝早く夕霧が落ち葉の宮の方よ
り出で給ふを見て御息所にかくと告ぐ召し使ふ女房を召
して聞き給へばありしこといもを語る然らば詮なし浮名
の立たばいかにせんこの上は夕霧のたゞならぬ心に従は
しめんこそ却つてよけれとて御息所より夕霧へ文をつか
はしけり夕霧の北の方其の文を取りて渡たさず夕霧は文
のこと柄わからねば返事とてせず其の儘に過さず御息所

は返事なきに夕霧を恨みて遂に死せり

(三十九) 御法卷

紫の上は年頃病身になりて弱り給へば源氏の思し歎くこ
と限りなし夏になりては暑つさに堪へで多く苦しかり給
ひ只管に弱はりゆくさまなり秋になりて涼しく成りぬれ
ば心地も聊さか宜しきやうなれど猶ほともすれば亂れ給
ふ中宮は内へ参り給ふとて暇こひに紫の方へ渡り見る
に殊の外瘦せ細そりて脇息に凭りて前栽を見居たり源氏
御覽じて心地よきにや起きて居たまふと嬉れしげに聞こ
え給ふ兎角する中に紫の上いと苦るしとて几帳引き寄せ

臥し給へるさまの常より頼もしげなく見え給へば中宮御
手をとるに消えゆく露の心地して今を限りに見え給へば
みなく打ち驚ろきさまく手に手を盡くせしかど其の甲
斐なく明けはつる程にきを果て給ふ源氏は今はこの世に
ほだしも無ければ世を背むかんと思へど歎きに思ひほれ
て遁世せしなど世の人にいはれんは口惜しと思ほして此
の程を過ごしけり

(四十) 幻卷

紫の上かくれ給ひてのちは源氏此の世に面白きこと無き
心地して明くる年の春の光りを見るも悲しさの改まるべ

くもなし紫の上が世にありける折のふるまひなど思ひ出
だして夜もすがら思ひつゞけ給ふことも屢々あり女三の
宮明石の上などへ渡り給ふにつけても紫の上のやうには
無くて一入物思ふたねとなりけり今年の八月十四日は紫
の上の一周忌なればとて曼荼羅の供養し給ふ

(四十一) 雲隠卷 これは卷名のみを留めて本文なし
此の巻中に源氏は薨せられたり

(四十二) 匂宮卷

源氏薨去の後打ち續くべき人未々の一門の中になし然れ
ども孫の三の宮女三の宮の御腹に出来たる薫の二方あり
三の宮元服して兵部卿の宮といふ薫は稚なきとき源氏の

御子にてはなしなどほの聞いて、吾が身に過ちあるやうに、いぶかしく思へり、生來身に香氣ありて、あやしきまで薫じ、恐ひ給ふ折りふしも、匂ひに隠くれ無ければ、自からうるさかり給ふ、兵部卿の宮は、此の香りを羨やましがりて、色々の香をあつめ、たしなみ給へば、其のまゝ、同心御匂ひなり、故に世人異名して、薫ほる中將、匂ふ兵部卿の宮とぞ、愛ではやしける。

(四十三)

紅梅卷

(四十四)

竹川卷

鬚黒大將と玉萬の中に男三人、女二人あり、姫君達を、女御に参めらせんと、玉萬は思へり、夕霧の三男藏人少將は、此の姉

君に心をかけ、文などつかはし給ふ、正月には藏人の少將、薫中將、此の家におはして遊び給ふ、姫君たちの碁を打ち遊べるを、少將のぞき見て、いとと思ひあくがれけり、此の四月姉君は冷泉院の女御にまゐれり、院の御心ざし深く、花やかた時めき給へば、秋好む中宮をばの弘徽殿妬み給ふ故、苦しがりて里がちになり給ふ、其の後若君一所、姫君一所を生み給へり、年月立つに従がひ、心よからぬ事のみ出来ければ、玉蔓は女御に出したるを悔ひ、藏人少將か、薫を聲に取らざりしを残念がれり。

(四十五)

橋姫卷

其の頃世にかずまへられ給はぬふる宮ちはしけりこれは
 桐壺帝の八の宮にて源氏の御弟なり故ありて冷泉院源氏
 等ぞ中らひ悪じかりければ御威勢衰へ給へり此の宮に姫
 君美しくしきが二人あり後の姫君を生み給ふのち北の方惱
 みて失せ給へり八の宮今は世を背むかんと思ほせど姫君
 を預け給はん方なければ心ならずも過ぎ給ふかゝるほど
 に此の住み給ふ宮焼けにければ宇治の山里に移り給ふ此
 宇治山に尊とき阿闍梨住みけり八の宮は佛法に志深かけ
 れば阿闍梨と常に物語りて早く佛門に歸したりければ姫
 君に心ひかれて此の儘にあるなど隔てなくいへり此阿闍

梨は冷泉院にも御經など授け給ふ故其のついでに八の宮
 のことなど談ず薫中將も坐にあり固より下心に道心あり
 ければ八の宮に相見んとて阿闍梨をして内通せさせ給ふ
 これより薫中將は屢々八の宮へ参りて教へを受けたり
 斯くすること三年ばかりに及びて秋の末八の宮の留守な
 りけるとき薫は参る折りしも姫君たち琴ひかせ給へり
 薫は物のひまより何心なく見給ふに大君の艶なる姿目に
 さまりて遽かに道心も失せなんやうに思ひ亂れたり此宮
 に仕ふる老女あり柏木のこと薫るの生まれ給ひしことな
 ど能く知りて薫に話せりそのかみ女三の宮と柏木文など